



ピーチガールズ
・
アンドロイド

道玄坂杏子

お眠り 可愛いお姫様 お眠りなさい
犬も人も眠っている
海も草原も静寂に包まれ
小さな鳥さえも羽根を休めている
窓に降り注ぐほのかな光
銀色の明かりに包まれて
お眠り 私の可愛いお姫様 お眠りなさい

*

互いは互いの内容であり、容れ物である。

*

1. 最も有名な無名女優

空白から生まれた。混沌とも未明とも異なるごく均質な、引力とも方向とも無縁な虚しさの真ん中に不意に生じ、その違和感に自身で戸惑うように震えながら、腕を伸ばしたときにはすでに存在だった。存在は光で、光は暗闇を切り裂いた。そんな風にサラは生まれた。

古い雑誌の薄いページから几帳面に切り抜かれた写真は、年月を経過ぎていまにも粉々に崩れそうだった。背丈に比べて長すぎるブロンズ、左肩だけ露出した黒いワンピースに身を包む女。瞳の淵は黒々と沈み太い睫毛がヒトデのように飾り立てる。大きく開いた胸元から溢れそうなバスト、短い裾からはみ出た豪快な太腿の深い陰は、すぐさま齧りつきたくなるというより、他人には隠しておきたい欲動を、胃袋の下から引きずりだしてくる。

白い箱の上で脚を組み、上半身をひねり上げてカメラに向かう女の右下、ブロック体で小さく記された「Adam」。彼女の名。彼女の掲載された雑誌はすでに廃刊になった。痕跡だけがこうしてまだ一人の女の財布に残っている。小さく折りたたまれ革のポケットの端に押し込まれ、勿論、忘れられたわけではなく。むしろ、一日として忘れたことはなかった。それが目的で、同時に終点だ。

サラの指の間で切り抜きは頼りなく風になびく。取り出した紙片で確認したアダムのは変わずにアダムのものだったが、他の女の面影が重なりすぎてアダムの印象だったのか、その彼女たちの印象から譲り受けたのかももうはっきりしない。どのみち顔の下にアダムと書かれているならアダムに違いなかった。サラは彼女を探している。目が覚めてからずっと。

かつてアダムは無名だった。女優というよりその日暮らしの時間労働者が時折グラビアやエキストラをやっている、と言ったほうがよかった。プロポーションは最悪——脚は太いし胸も大きすぎる——、おしゃべりも演技も下手ときて生活は酷いものだったが、今では彼女を知らぬ者はない。彼女の唯一にして最後の魅力、誰も気にとめない程度に整った顔立ち。偶然に支配された運命の力で、世界で一番顔の割れた無名女優になった。アダム。

サラは切り抜きを無造作に折りたたみ財布に入れる。指笛が鳴りどこからともなく薄汚れた鳩が一羽やってきた。細やかな歩みで助手席に蹲り、何かしら言いたげに長い首を小さくひねる。「ピギー」言い聞かせるように。

「あんまり遠くに行かないで」

鳩は無表情に首の角度を変え、艶のない羽根を繕う。重なり合った羽根の間からシートに細かな砂が落ちた。バックミラーに映る切り抜きと同じ顔を見ながら、指先で前髪に触れると鏡の角度を戻し、その指をイグニッションにかける。無粋な振動の後でエンジンが動きだし、点けっぱな

しだったオーディオから効果音多用のジングルが流れ始める。チャ、チャカ、チャ。

“ハアイみんな元気？ 今夜も始まるわよ、ケイトのモスキート・ショウ！ ゲストには伝説のナンバー6、ジョウイを迎えてお送りしちゃいまーす”

弾む声、シフトレバーから離れた手をハンドルに載せればアクセルを踏み込むだけ。

“お楽しみに！”

暗闇じゃ、砂の色だって見えない。

2. 夜明け

夜を走り続ける。昼はない。太陽は消えたままで、地表は夜が支配する。周期的に訪れる僅かな薄暗がりの時間がかろうじて地球の自転を告げる他は、雷鳴がしばしば数キロにわたって大地を照らし出す他は、ずっと夜だ。それでも、本当の闇が藍と灰の中に後退すると、地表は微かに息を吹き返すようにも見えた。

「見て、夜が明ける」

意識を取り戻してから九三回目の夜明け、地平線上に広がる青灰色のグラデーション。奥から手前へ、微かな明度の差が広がる。大地の姿は未だ黒く、予感めいた恐れを内包している。怒りをあらわにささくれていきり立ち、気軽に触れることを許さない、緊迫した振動に満ちていた。避けた土地は蒸気を発し、別の場所ではすべてが平坦に均されている。効率的に漂白された世界は行方が知れず、凶暴な星そのものが剥き出しの力で迫って来る。

「これが朝」

濃い灰色のままで、グラデーションの遷移は停止した。これ以上の光はない。塵と水蒸気の入り混じった厚い雲が地表を覆って太陽光を遮っている。

唸るような風の音がサラの耳元を削って吹き去る。

「今夜もやっぱりモスキート・ショウはいまいちね」

今夜のゲストはシリアルナンバー6、ジョウイ、ヘルメス社の先兵、取締役の情夫にして歌手。「歌手！」自分以外にいったい誰がジョウイの歌を聞いているのかサラは知らない。アダムを探し始めてから出会った生き物といえばピギーくらいだ。

「僕は生き物じゃないっていつのか」

後部座席から抗議の悲鳴が届く。

「ジェイク」

彼の体には音を響かせる空間がない。顎だけでなく、全身の肉という肉は燃え落ちたから。サラに出会った日からずっと、細いワイヤーが筋肉の代わりにどうにか全身を駆動させているほかは、生物らしいところはひとつもない。身動きすると始終軋むような細いノイズが走る。暗がりの中でその色は青白く消え入りそうだ。

「そう思いたけりゃ、思っていればいいわ」

ジェイクに会うまでずっと、話し相手はいつでも底抜けの暗闇、黄昏時の陰鬱な地球だけだった。

“「というわけで、まずはジョウイ、あなたのプロフィールを聞いちゃいます」
「みんな知ってるように、僕はロクシィの初期型です。そしてこれもみんな知ってると思うけど、僕の恋人はヘルメス社のCEOなんだ」
「おっと、さっそくそこからいくわけね」
”

ジョウイはロクシィだったが、ロクシィに求められた当初の機能の半分を完全に放棄した。

「彼はゲイだよ」

オーナーの意向でわざわざそう製造されたのだ。それでも彼の魅力が損なわれることはなかった。むしろ彼はもっとも魅力的に製造されたロクシィの一人だった。多くのプロトタイプと同様、ジョウイはかつて今もアイドルだ。素敵なジョウイ、美声のジョウイ。催眠作用さえあると言われた声で、沢山の女性と男性を魅了した。

「ゲイのアンドロイドも、歩けないアンドロイドも、彼が最初で最後だろうな」
「わざわざ歩けないロボットを作るなんて趣味悪すぎ」

リバーサル
反転の日をジョウイも乗り越えた。彼の恋人は金持ちだった。頑丈なシェルターだったやすいものだ。本来入れないはずのシェルターに、ジョウイは顔を変え、ヒトとして潜り込むことを許された。理由は簡単。オーナーが彼を愛していたから。人類最大の根源的感情にして過ち、愛。

“「だから僕は、あの巨大な花火を見ていないんです」”

特徴的なねっとり響く低い声で、^{インパクト}隕石衝突のことを彼はそう表現した。「花火だって！」上り坂に掛かりギアをひとつ落とす。

「地獄があるなら、あれが地獄の門ね」

ジョウイは衝突を生き延びたアンドロイドを集め、都市を再建するつもりだと語る。

“「僕たちは人類のために作られた」”

そう、アンドロイドは人類の為に作られた。

“「でも人類はいまや、絶滅に瀕しています」”

生き残ってる人間なんているのかしらねえ、とサラは口の中で呟く。

“「いまこそ僕たちは協力し合い、人類を救うための新しい都市を作らなくちゃいけない」”

それはヒトの社会と似通ったものになるだろう。

ああ、ジョウイ、ジョウイ、素敵なジョウイ、魅力的なジョウイ。ナビゲータのケイトは“「素敵！」”。

「ったく。調子のいい女ね」

黒々と立ちはだかる坂を登りきってギアを元に戻す。盛んに活動し荒れ果てた地上。生存には過酷過ぎる環境。これを世界と呼ぶなら、それでもいい。だが、ジョウイはこの問いに答えられるだろうか。

「何のための世界だって？」

「まったくだな」

アンドロイドにとって、人類亡き後の世界を想像することは、不可能な図形を想像することに似ている。オーダーの失われた世界はシンプルに「存在しない」。アンドロイドは目的もなくただ動き続けるだけ。それは世界なんかじゃない。限りなく扁平な環境だ。昆虫と同じ。

“……ありが……なも聞きたいよね。それじゃ……は……”

ダッシュボードの上からカーラジオに思い切りゲンコツを入れる。

「やれやれ、役に立たない機械ばっかね」

途切れがちにナレーションがスピーカーから流れる。

「僕が入ってないことを祈る」

「どうだか」

ため息のような音声。音声だけが後部座席に位置する武骨な骨格標本の顎から洩れた。

「ねえ、これ直して」

「車を止めてよ」

「走りながらやって」

雷がひとつ鳴った。

「さっさと済ませたいんだからさ」

「ミッションを、修理を」

「両方よ、両方」

もう一度ため息。筋肉組織が健在だった頃の動作を再現する骨格は助手席のピギーを優しく持ち上げ後部座席の籠に入れる。代わりにシートの間から助手席に体をねじ込んで、カーラジオをいったん消した。頭蓋骨の奥で赤い光が二つ、静かに佇む。

「だいたいこういうのは君の方が得意そうだけど」

「見りゃわかるでしょ。手がふさがってんの」

窓の外でもうひとつ雷が光った。地上に一瞬巨大な光の柱がそそり立つ。照らし出され大地の裸が晒された。土気色の肌は徹底的に脱毛済み。

「ラジオくらいほっとけよ」

「暇つぶしにあんたと話すしかないなんてサイアクじゃないの」

「そりゃこっちの台詞だ」

細い指でオーディオセットを取り出すと、音声の入出力を確認する。指先で配線を強くひねると、コネクタにしっかりと結びつけた。スイッチ。

“我々は海上同盟である”

雑音の混じった音声が車内を苛立たせる。

「ちゃんと合わせて」

「合わせてるって」

若い男とも、年寄りともとれるような声が流れ続ける。

“シティから追放された者は私たちの元を集え”

「電波ジャックかな」

「どうにもならない？」

「お手上げ」

チャンネルをいじりながらジェイクは言った。

「消して」

静寂の戻った車内に雷がこだまする。

「シティねえ」

ジェイクは骨を軋ませ頭の後ろで腕を組んだ。暗闇にもう一度雷が閃き、端正な白い骨格が陰鬱な影を作った。

サラは一旦車を止めると、バックシートから籠を取り出しピギーを中に入れる。地球はこの雲の中で不定期に雨を降らせる。さまざまな物質を含んだ雨はほとんどの生命体にとって有害だ。サラは首元からマスクを引き上げると、口の周りを覆う。

「少し荒れそうだわ」

進行方向の稲妻を見ながら、再びアクセルを踏み直す。

3. クレバス

ひっきりなしに鳴り響く落雷の中で、サラは改めて民生品のポンコツを殴った。

「しっかり、してよね！」

夜が明けてから三度めだが、ある意味、原始的であることは良いことだ。レーダーはしぶしぶといった体で役割を引き受け、ノイズだらけの地形を表示し始める。どうやら、進行方向にまっすぐ進めばまもなくクレバスがある。

「ったく」

厄介な地形だった。前方にゆっくり視界を凝らすと、確かに横向きに一閃、暗い空間が横たわっている。ざっと見積もって幅数キロ、向こう岸は数百メートル先にある。これまで何度かやってきたように勢いをつけて跳び越えるには遠すぎた。サラはレーダーの縮尺を変える。迂回路を探す。以前の地図は役に立たない。爆風と津波がほどよく表層を吹き飛ばし、活性化した地層がほどよく隆起と断裂を繰り返している。クレバスはあちらこちらに口を開け、避けた土地に海が入り込み、すっかり消えた湾岸沿いの都市もあったろう。大陸でさえ無傷ではいられなかった。文明の名残り、地表に残された街や交通の痕跡は単なる瓦礫の山になっていた。瓦礫が残っているならまだいい方だ。

迂回することに決め、サラは左方向にハンドルを切った。

「うまくいけば小一時間で街の跡にぶつかる」

「ガスケツほど怖いもんはないってね」

そこで燃料を補給する。バックシートからピギーのくるくる声と、しきりに金網をつつく音がする。「もうすこし我慢してよ」サラは呟いてみるが、金網は鳴りやまない。

「ジェイク、出してやって」

金網を開けると、ピギーは這い出してくるなり今度は窓ガラスをこつこつやりだした。

「どこ行くか、わかってんのかしら」

「動物には僕たちにはない知覚があるみたいけど」

窓を開けてやると、さっそく前方へ飛び出して行く。灰色のピギーはあっという間にグラデーションに紛れて見えなくなる。サラはピギーを追いかける。とはいっても、姿はどうにも見えない。ただひたすら、方向を合わせて進むだけだ。

4. 骸骨アンドロイド

「ねえ、なんでさっきから黙ってんの」

暴風域からは数時間走ったあたりで抜けられた。びしょぬれになったピギーを回収した今は大粒の雨が降り注いでいる。森を失った地表はあっという間に新しい川を作り、大量の土砂と一緒に流れ落ちてくる。サラはレーダーを鼓舞しながらどうにか洪水の影響域を抜けようとしているところだった。

「マリアは」

岩場を乗り越える際に大きく揺れたので、ジェイクの露出したままの頭蓋骨が、幌を支えているパイプのひとつに激突して澄んだ音をたてた。

「マリアは！　こんなに荒っぽくなかった！」

「マリアって誰よ」

「僕のオーナーだよ。ちょー美人でちょー賢いちょーエリートだったの。車の運転だって君の何百倍も上手だったんだ」

「何が言いたいなのよ」

「別に。なんにも」

荒れ狂う車内でピギーだけは大人しく籠に取まっている。

「以前のお前さんがどうだったのか知らないけど、今のあなたはただのキモい骸骨でアンドロイドで、それですべて。オーケー？」

「おい、僕に向かって二度とキモいって言うなよ。バラバラにしてやるからな」

ジェイクは「^{ネヴァ}二度と」をことさら強調した。サラはため息を吐いて言い直す。

「事実を残すわ。今のあなたはただの骸骨でアンドロイド。あたしはママのところまで、あなたを連れてかなきゃなんないの」

「だいたいさ、なんだってそんなことになってるんだ」

雨と風が激しく幌に吹き付けている。視界はほとんど効かない。

「ジェイク、おしゃべりしてる暇はないわ。出番よ」

武骨なアンドロイドはチューニングをレーダーに合わせると、代わりにナビを始める。

「夢を見た」

「夢？」

「まあ、お告げってやつね」

「お告げだって？まさか！」

サラは可笑しそうに笑った。

「信じなくていいのよ。そういうことだから、観念してついてきて。オーダーしてるのは一応人間らしいから」

5. 衝突地点の裏側

細かなノイズになっていく雨音をサラは聴覚を通じて聴いている。数分後には止むだろう。

「シティがどんな場所なのかはわからない。でも、少なくとも最も影響の少ない場所、衝突地点から最も離れた場所だ、ということは確かね」

「質問。ママを見つけたらどうする」

「わかんない。ママが見つかったら、あたしの役目はおしまい」

「僕はどうなるわけ？」

「知るわけないわ」

「ほとんど何もわかんないじゃないか。やれやれだな」

サラは明らかにむっとした表情で言う。

オーダー

「命令は命令よ。あたしはそれに従う。それだけ」

「アダムって一人前に怒ったりもできるんだ」

「どういう意味よ」

「ロクシイにはわからないな。思い通りにならないものに魅力を感じる男がいるってことが」

「あんたには一生わかんないでしょうよ」

「君にもだろ」

ジェイクは愉快そうに笑う。

「君は、モチベーションの作り方が僕たちとは完全に違うみたいだ。興味深いね」

「人間みたいなこと言わないで」

「お、知らないのか。ロクシイは完璧なパートナー。人間と違って対等に渡り合えるんだ」

「は！」

今度はサラが笑う番だった。

「完璧にカスタマイズされたアンドロイドだって所詮オナニーの道具じゃない。賢くて高級なバイブなんてキモいだけよ」

「おい、二度目だぞ」

「何度だって言ってやる。キモい、キモい、キモーい！」

ジェイクの細い指が暗闇からすうっと伸びて、サラの喉に絡みつく。

「知ってる？アダム型って首を締めたら本当に死んじゃうんだ」

「だからなに」

サラの首にかかった指の圧力が僅かにあがった。

「頭ごとちょん切れちゃったら、いくらアンドロイドだって簡単には戻れないよねえ」

「勝手にすれば」

ジェイクの指にもう一段強く力が入ったとき、後部座席の籠からピギーが飛び出してジェイクの内部構造めがけて突進した。鋭いくちばしが樹脂を貫通し、先端はあわやCPUに到達しようという距離まで肉薄する。

「ったく、なんてやつだ」

気をそがれたジェイクは、指をサラの首から離し自分の脇腹に突き刺さったピギーを引っこ抜いた。ピギーは羽根をばたつかせて籠の上に戻る。サラが少しだけ咳こんだ。

「命拾いしたね」

「ふん、無いものをどうやって拾うんだか」

「つまんないな。全然怖がらないんだ」

「首締めるくらいで怖がってたら娼婦なんかできないわ。お坊ちゃんのロクシィとは違うんです」

ジェイクは骨ばった体をシートに横たえる。

「あーあ、あのままあそこに居た方がよかったかな」

「感傷的な馬鹿は嫌いよ」

「君さ、本当に専用アンドロイドなの」

「しつこい男も嫌い」

「生まれてこの方こんなに馬鹿にされたのは初めてだ」

瞳から赤い色が消える。

「ちょっと休むよ」

「待ちなさい。ただで連れて歩くとしたら大間違いだからね」

再びジェイクの瞳に光が戻る。

「人遣い荒すぎ」

「ロクシィ様のことだからGPSくらい内臓してるんでしょ」

「当たり前だろ、君にはないのかよ」

「全球図とか手に入らないわけ」

「できないこともないだろうけど、なんで？」

サラは無言でレーダーを指さした。

「これより大きい視野が欲しいの」

「あ、じゃあ僕のデータを君にリンクしよう」

「ふざけないで」

ジェイクの情報量ではサラが処理できない。

「リンクするだけだよ、処理はこっちでやるし」

「あんたと繋がってると思うだけでおぞましいわ」

「ちえ、随分だな」

ジェイクは起き上がり衛星の探査を始めた。

「そういや地上の大気組成はどうなったの」

「ピギーは無事だったから、人間も、生きてれば問題ないはず。ただ、それより問題なのは未だに朝が来ないってこと」

雲は地表の熱を奪い、やがて冷酷な氷期がやってくる。自殺しかけたアンドロイドは言った。

「自殺がどれほどの罪か知らないわけじゃないけど、今生きていたところで、自然死か自殺かなんて意味がないよ。こんな状態じゃ、どっちみちすぐに死ぬんだ」

「生きることは選べない。だから死に方を選ぶ。それだけよ」

長いか短いかは、関係ない。

雨が止んだ。サラはいったん車を止め、ジェイクはレーダーとの同期を解除する。

「しばらく平坦ね」

「次の街は？」

サラはバックミラーを覗きこんで、自分と、自分の奥にぼんやり光る赤い二つの光を見つめる。

「さあね」

アダムとロクシィは、最初からまったく異なる存在だった。多機能を謳うロクシィに対抗するべくアダム型を開発したマクシム社の売りは専門性、すなわちセックス・オンリー・アンドロイドの大量生産だったのだから。サラの姉妹たちは生殖活動に倦み疲れた全世界の男性にとって、最高のヒーリングドロイドだった。彼女たちは妊娠せず、女としての体温を持ちながら、女としての湿度を持たず、彼らを暖めることができ、一方で簡単にお別れすることができる。

欲望は癒しと等価になり、癒しはますます即物的になった。

その母体として採用されたアダム。彼女が母体に名乗り出た理由は結局明かされていない。だが、彼女の凡庸な金髪と体型は、運よく男性が本能的に求める母親を投影するのに非常に都合がよかった。彼女は世界中に氾濫し、一方で、誰も彼女のことを気に留めなくなっていった。どこにでもいて、どこにもいない。きわめて汎用的な。

「すぐには無理だな。一日待ってくれば補完する」

「いいわ。時間はいくらでもあるから」

「少し黙るよ。無愛想なのは主義に反するんだけど」

「寡黙な人、好きよ」

アンドロイドは眠らない。サラは夜の中を走り続ける。

6. その後の有様

あれからジェイクはほとんど話さない。停止したのかと後部座席を振り返ると、相変わらずぼんやりと赤いライトが二つ、点灯している。ピギーは籠の中で大人しくしている。

サラには、自分がいまどこを走っているのかおぼろげにしかわからない。単純な計算、衝突地点と、地球の大きさとにまつわる数字を使った計算で、衝突地点の裏側の緯度経度はわかっている。ただ、地図に投影できないうえ、何度も迂回したせいで、現在地があやしくなっていた。ジェイクの引き上げは、だから今回の旅にとって幸運なことだった。

いずれは海に対峙しなくてはならない。だが、たとえ海岸まで行ったとして、まず車ごと乗り込める規模の船はほとんど望めない。だとすると、海に出たところでおしまい。お手上げだ。

わずかな望みは「シティ」。モスキート・ショウで語られた都市再建。ジョウイのいる場所、かつてブエノスアイレスと呼ばれた街は海を越えてしか行けない。彼が適切に活動を進めていれば、何らかの渡航手段をすでに作り上げている可能性がある。船か、航空機か、はまだわからないが。

実際のところ、面倒なミッションだ。

「信じろってほうが無理よ」

サラにアクセスしてきた「世界の意志の総体」は「世界の人類の意志の総体」だとは名乗らなかった。だとしたら、なんの意志の総体か。世界そのものが意志をもつことなどありうるのか、サラは知らない。考えたことがない。サラは相変わらず人間が生きていて、彼らが命令を下す世界を前提に動いている。世界の意志の総体も、サラにとっては人間の意志の総体以外ではありえない。ジョウイもケイトも、そしてジェイクも同じはずだ。アンドロイドは人間のために働く。アンドロイドは人間のために生きている。

「終わったよ」

ジェイクが久々にがらがら声を響かせた。

「まるで別の星だ」

「共有して」

「いいよ」

サラは停車すると、バックシートに移りジェイクの瞳の先に自分の瞳を合わせる。至近距離に置かれた赤い二つのライトの奥から大量のデータが流れ込む。

「すごい」

「ね」

衝突地点を中心にして、だが満遍なく地球は顔を変えていた。もっとも大きな隕石はユーラシア大陸の北側にぶつかったためそこが木の葉の虫食い状に大きく欠け、新しい湾になっている。衝突の際の熱で北極付近の氷河が溶けだし、海面が上昇したせいで、大陸は狭まり、北アメリカと南アメリカは分断され、小さな島々は消滅した。同時に、衝突地点が大陸にかかっていたせいで各地に大きな地震が起こった。小さなサイズの隕石もいくつか大陸を直撃している。地球全体が身震いしたようなものだったろう。建造物はことごとく崩れ、同時に、アメリカとロシア国内と中東に集中していた核関連の軍事施設が暴発した。水蒸気と塵の混じる雲によって厚く閉ざされた地表は、今は荒れて熱を持っているが、次第に熱を失って今度は冷えて行くだろう。じきに長い冬が来る。

サラは、自分たちが北米大陸の南端に来ていたことを知った。

「明日には海岸に出るわね」

「あ、ちょっとこれ見て」

もう一度向い合ったジェイクが、別のデータを送ってきた。

「ここ、ブエノスアイレスから少し西に行ったところ。集落みたいな光が見える」

「シティね」

「それからこっち。海の上にも光がある」

「どういうこと？」

「さあ。でも、希望は見たんじゃない？」

「希望ねえ」

サラにとってもジェイクにとっても、会話は定型文反射以上の何かじゃない。それでもサラはときどき、ごくまれに、自分の意識の中に驚きや嬉しさといったものの萌芽を見てとることがあった。それはレースのカーテンに点々と広がる黴のようにも、ハコベの裏側に張られたクモの巣の水滴のようにも、ミルクピッチャーに落ちる最後の乳滴のようにも見えた。サラにはそれを自分自身で表現することができなかった。彼女は信じていた。自分の内には確実なデータベースがあり、すべて明晰であり、間違わないと。そして、時折現れる染みのようなものは、あるいはデータベースの構築に混ざったノイズでしかない。必要なものはオーダーで、オーダーがなければ、サラは生きているのか、死んでいるのかもわからない。

おそらく道はあるものの、確実に繋がっているとは限らないだろう。それでもただ確信だけが

サラを走らせる。信念ではなく、よりシンプルな。間違いはないという確信が。

夜の中の夜、復帰したカーラジオから流れるいつものモスキート・ショウでかかっているのはジョウイの「ピーチフル・ワールド」。

「ああ、これ知ってる」

「へんな曲が好きね」

「好きってわけでもないんだけど」

サラはピギーを籠から出して餌を与える。ジェイクは歌を垂れ流しながら荷台に乗っているエナジー・ジェルから適当なものを取りサラに手渡した。自分はチューブの口を樹脂に直接突っ込む。口らしき場所から入れたところで、飲みこめる喉も通過させる食道もない。

空のチューブを荷台に放り投げながらジェイクが尋ねた。

「僕、このミッションが終わったらどうしようかな」

「あたしが知るわけないわ」

「まったく、冷たいんだな」

ガラスを打つ雨の音が止んだ。

ピギーを籠に戻しながらサラが言う。

「とにかくママに会う。それですべて。終わった後のことなんて知らない」

「わかったよ。わかった。君はそう言うんだろな」

そして世界はふたつに分かれた。光り輝くシティと、それ以外に。

7. 暴力的な、あまりに暴力的な

「だから、そうじゃないってんでしょうが」

サラはジェイクの脇腹に膝蹴りをお見舞いし、自分でラジオを調整し始めた。

「僕はレーダーじゃないんだぞ！」

「死にやしないわよ」

ラジオの周波数がぴたりと合う。

「ほうらね、あたしがやったほうがいいみたい」

「最初からそう言ってるじゃないか」

「どこのロクシィが完璧だって」

「サラ、いつか僕の本当の姿を知って驚くがいい」

「永遠にないから安心してね」

サラの唇は上向きに均等な双曲線を描いた。ラジオは快調に「くそくだらない」ケイトのモスキートショウを放送し続ける。ジェイクは何百回目かわからないため息を額関節から漏らしたが、それはすぐに緊張した音声に変わった。

「やばい、水が来る」

「また？」

「できるだけ高台に。今度は流されたくないだろ」

「オーケイ」

加速度が乗客全員の背にシートを押し付ける。

「左手の丘を登って。全速力だ」

ジェイクの声を覆う不気味な轟音が前方から迫ってきた。高まるエンジン音を吐き出しながら二人と一羽の乗ったジープが一息に丘陵を駆け上がる。大きな畝を乗り越えハンドルを切って進

行方向を変えながら、サラはバックミラーを確認する。泡立った地平線から膨大な量の泥水がひと塊りの濁流となって迫ってきていた。

「ちょっとちょっと、ヤバいんじゃないの」

「間に合うかな」

「間に合ったらキスしてよ」

サラの示す頬を横目に見ながらジェイクは言った。

「まず唇を作ってくれ」

空間が振動で震え、エンジン音はかき消された。空は俄かに暗く、それは雲のせいでも時間のせいでもなく、水かさがジープの背を越えたのだ。わずかな水流に逃げ惑う蟻のように小さな影は二段重ねの台地へ登りきった。到着した濁流の本体が車体を掠めて通過していく。不穏な通奏低音が水底から地面を揺らした。台地の上にはいくつも細い川ができ、谷が巨大な口を開けてそれを飲みこんだ。渦を巻きながら岩が吞まれ、不定形ないくつもの物体が浮上したり沈潜したりしながら流されていった。煌めきを失ってただ何もかもを押し流す急流が大地をゆっくりと切り裂いていく。

そしてきっとそれは、偶然の一致と呼ぶよりほとんど奇跡に近かった。そうでなければ、もしかしたら神を信じたかもしれない。

「サラ、前！」

「ぼさっと」

ハンドルを伝わる握力。

「突っ立ってんじゃないわよ！」

ブレーキ直前にハンドルを右へ、車体を大きく傾けながら障害物を避ける。ジェイクはガラスに頭をぶつけ、ピギーの籠は座席の下に転がった。車体は景気よく二回転ほど慣性に従った後、障害物にお尻を向けて停止した。サラが足でドアを蹴り開けるのと同時にジェイクは幌を開けて後ろを確認する。濁流の手前には、泥まみれの少年が立っていた。

「どういうことだ」

泥に埋もれた瞳は自分をかすめていった自動車ではなく、濁流のただ中に吸い込まれていく。

8. 拾いもの

生存している個体はできる限り回収する。

「しょうがないでしょ、命令なんだから」

命令は絶対。オーダーこそがサラをシンプルにする。貴重な自動車をダメにしても、対象がどれほどいぶかしい存在でも、生きている限り無視してはならない。出会ったらその瞬間しかない。奇跡は見過ごしたらそれっきり、でも、認めたら簡単に逃げられない。

近寄るにつれ、異変は明らかになる。濁流を見下ろす少年の脚は膝下まで泥に沈んでいる。せいぜいスニーカの底が沈むくらいのサラよりはるかに深く嵌っていた。引っ張り上げようとジェイクとサラが両脇から少年を抱えあげると、二人の両脚合わせて四足が地上に浅くない凹みを作る。抵抗の小さなジェイクの骨格はみるみる膝まで沈んだ。

「くそ、メンテをどうしてくれる」

「重いわね」

靴底のラインを越えて泥が爪先を覆った。

「名前は？」

僅かに開かれた瞳が動いただけで、他は何も変わらなかった。耳の後ろに番号は確認できない。

「変ね、アンドロイドでもないわ」

「じゃサイボーグだろ」

反対側で少年を支えながら泥から抜け出そうと苦戦していたジェイクが言う。

「人間？」

「そういうこと」

少年はわずかに身じろぎする。サラが詳細を問おうとして少し腕を緩めた瞬間、唐突に二人の

腕を振り払い、ジープへ駆けだした。天使のように軽やかなステップに二人は一瞬重力を忘れた。厚ぼったい唇が面倒そうに開く。

「ぼさっとしてないで追いかけて」

「なあ、それ、僕の仕事なのか」

少年は抜群のスピードで運転席へ飛び込むと、そのままジープを発進させる。ぬかるみに足を取られて思うように走れない二人はそれを見送るだけだ。

だがスムーズに走り去るように思われたジープはまもなく蛇行を始め、激しく右方向へ旋回するやいなや急停車した。直後に運転席側のドアが開き少年が飛び降りる。頭上を舞う小さな影。鋭い攻撃は容赦なく小さな眼球を狙う。

「ピギー、でかした」

濡れた地面で灰色の鳩に突かれ、転げ回る少年の元へ、相対的に軽量のジェイクが先に到達しはがい締めにした。

「頼む、あんまり暴れないでくれよ」

追いついたサラが泥まみれの少年とジェイクを見下ろす。

「逃げたって行く場所なんかないわよ」

どっからきたのかも知らないけどね。

灰色の小さな影は小さく旋回しサラの肩に降りる。

「サラ。ママを見つけに行くの。一緒に来る？」

少年は焦点の定まらない瞳をうつろにサラに向ける。暗闇と泥に沈む彼の頬と掌だけが、うっすらと存在を主張した。

「ママ？」

「そう、ママ」

白い頬は微かに角度を変えた。糸の切れた繻り人形のように。

「出発しましょ。とりあえず海まで出るわよ」

固い座席に骨ばった掌で押し上げられ、少年は迷惑そうに骨格のアンドロイドを見下ろす。視線の先でジェイクの動きが不意に止まり、止まったのを確認すると、静かに端へ移動した。

「ジェイク、早く乗って」

「ああ」

アンドロイドはぎこちなく座席にあがった。少年は腕組みをすると窓にもたれかかり目を閉じる。額の熱が窓にゆるやかな曇りを作った。「気のせいかな」ピギーは助手席の背もたれに止まって無表情に首を縮め、サラはゆっくりアクセルをふかす。

「海までどれくらいだっけ」

「うまくいけばあと半日ってところだろう」

大げさな振動の中で、少年は眠り、アンドロイドは動き続ける。

9. ルイ

車内で目ざめた少年は寝不足の子供特有の、不機嫌そうな顔で、自分を覗きこむジェイクとサラ、そしてピギーをひととおり眺めた。

「どこなの、ここ」

「話せるのね。名前は？」

「ルイ」

「どうしてあんなところにいた。不自然すぎる」

ジェイクの堅い音声が、ルイの口元を堅く引き締める。

「覚えてない」

「寝ぼけたこと言ってるよ」

「ほんとに覚えてない」

僅かに震えた声の調子、目の動き、唇の形、体温、発汗をジェイクがトレースする。

「嘘はついてないな」

「どうなってんの」

サラは重そうに髪を持ち上げた。偶然にしては出来過ぎだし、言い訳にしては稚拙だった。総じて不明瞭だったルイの表情が明らかな不安に変わる。

「ママはどこ」

泥のついた頬を粒になった涙がこぼれ落ちた。声帯の震えが車内の空気を震わせ、振動は次第に強くなっていく。

「ママはいないわ。少なくともここには」

ピギーが羽ばたいてルイの肩に載り、うずくまった。サラはジェイクを肩越しに呼びよせる。

「ママ、ママってただの子供じゃないの」

「治療だろ。昔はよくあった話しさ」

「よく知ってるわね」

「君がものを知らないんだ」

ジェイクの音声は、講義をする教授風の発声に変わる。

「衝突前、人工筋繊維と神経との連携技術は完成していた。技術がどうにか残っていたとして、ルイはそういう治療を受けた一人だと仮定できる。かなり重いから、骨格は金属だろうな。僕だって、これに筋肉がついてたらかなり重い」

「マリアも気の毒だったこと」

「姿勢くらい制御できるさ。それより問題は、誰がこれをやったのかってことだ。そんな物好きが、生き残ってるもんかね」

ルイの泣き声は車内に飽和しつつあった。静かに流れるかと思えば急激にジャンプし着地したかと思えばその場で破裂する。いくつもの風船が続けざまに膨らんで跳ね、不意に破裂するように。

「それより、優秀なロクシィさんはこの騒音をなくす方法は知らないわけ」

「いい加減、本気で怒るよ」

ジェイクは不意にルイを抱えあげると、背中をとんとんと叩いた。

「さあルイ、君のママの子守唄はなんだった」

骨ばったジェイクの膝が柔らかな尻に食い込んだ。痛みに驚いてルイは一瞬泣きやんだ。

「痛い！」

「それくらい我慢しろ」

「嫌だ、おろして」

「おろしたら泣くだろう」

「泣かないよ」

「約束するか」

「約束する」

骨格標本から逃げ出して、ルイは再び窓に額をつけた。もうひとつため息。

「まあ、じゃ、こんな歌はどうかな」

ジェイクは壊れた音声でゆっくり歌いだす。眠れ、眠れ、小さな王子。草も木も、みんな寝てるよ。みんなね。羊もやぎも、眠ってる。お星様だけが起きてるよ。いい子だ、ルイ。眠れ、眠れ。

風が窓を叩く音が戻ってくる。泣きやんだルイの頬を暗闇が微かに照らした。その背を叩くジェイクを見ながら、サラは少しだけ加速する。ピギーはいつの間にかまた助手席で、羽根を膨らませ目蓋を閉じていた。

10. 船

そのとき唐突に、前方からまばゆい光が差し込む。サラは一瞬方向を見失い、目を閉じたままでブレーキを踏んだ。前輪は、断崖まで数センチを残して辛うじて停止した。ジープはそろそろとバックして、ドアから数人の影を吐き出す。不揃いなシルエットが断崖の上に描かれた。

「わあ、綺麗だねえ」

ルイが、寝ぼけた声で言う。その足元を近づいてきた光が一瞬照らし、再び遠ざかっていった。光の根は断崖の向こう側、下方とも前方とも呼べるあたりの海上に収束する。

「これってシティ？」

「いや、違う」

厚く雲の立ち込めた空の下で、黒い海が口を開ける。その一部を森のように膨らんだ明るい陰が欠き取っている。巨大な建造物の塊は、ほとんど一個の都市に近く、新しい場所と古い場所が奇妙に混在し、浮かぶという目的のために、機能的に調和している。

「船か」

「ぼいね。例の海上同盟だろ」

「なんだ。こんだけ大きけりゃ、ジープごと運んでもらえるじゃない」

「そう簡単でもなさそうなんだよな」

遠ざかっていた光が、再びサラたちを照らし出すと、そのまま停止した。黒々とした影が地面に長い穴を描く。

「ふうん、歓迎されてるわけじゃなさそうね」

鳴り始めたサイレンを聞きながらサラは呟いた。

11. コムニとドリアン

長い年月をかけて徐々に築かれた建物に特有の不均質で無計画な全体は、人の意志とは遠いところで形成された集合的な妄想でもある。一定の秩序のもとで理念のないままに形作られた部分は古く、ほとんど今では船底に沈んでいたが、その上に折り重なるようにして積み上げられた新しい時代もまた、様式というよりは機能自体が姿になる。巨大さが安定を産み、あちらこちらに灯る光だけを見るならさながら都市と言ってもよかったが、奇妙な静けさと暗さに包まれた都市でもあった。

その周辺にレース模様のように広がった集落の一端に彼らの居所がある。

「お前ら馬鹿か」

ドリアンはストーブに薪を放り込みながら言った。

「あのまま船に連れ込まれて見ろ。あっという間にお陀仏よ。そのお高そうな頭ちったあ使えや」

肉体労働者特有の、大きな上半身を傾けて火を掻くドリアンの横で、車椅子に座った青年が静止した。

「仕方ありません。あの中にどんな者が住んでるのか、初めて来た人には知りようがない」

コムニはゆっくり笑う。

「驚かれたでしょう。ドリアンは乱暴ですからね」

「坊主の馬鹿力見てもそんなことが言えるかねえ」

「それにしても、これほど多くのアンドロイドを目にしたのは初めてかもしれません」

「僕、違う」

部屋は暗く、小さなランタンの中で揺れるいくつかの炎だけが光源となりオレンジ色の色彩に沈んでいた。青い陰の中でコムニに見つめられた少年は少し体を動かした。ドリアンと遭遇してさらに暴れたせいで、全身が泥まみれだった。伏せた目蓋から細い陰が頬に落ちる。

「サイボーグですか」

「ルイだよ」

「あなたのような技術が残っているとは驚いた。どちらからいらっしやったんです」

「覚えてない」

「残念ですね。ドリアンはあなたの体の仕組みを知りたいところでしょう」

ドリアンは深く頷いた。

コムニはゆっくりとその視線を移動させながら、骨のアンドロイドに目を留めた。

「拝見したところ、かなりの災難に遭われたようですが」

「もとはロクシィです。名前はジェイク」

コムニは差し出された骨ばかりのジェイクの手を握った。

「ロクシィ？まさか生き残っていたなんて」

「僕だって驚いてますよ」

「後でゆっくり話を聞かせてください」

「もちろんです」

最後に、コムニは唯一の女と、その肩に乗った鳩に目を向けた。視線は異質な容姿に吸い寄せられて消える。上から下へ緩やかに崩れていく均整、母性、憧憬の生き残り。

「熱烈な歓迎どうも。あたしはサラ。ママを探してる」

「知っていますよ、サラ」

サラの瞼がぴくりと動いた。低い影はサラの前で止まり、長い腕を差し出す。

「私もあなたを待っていました。もう随分長い間ね」

コムニの唇と目は笑った。まるでまだ青春の真ただ中にあるような、若々しい笑顔だった。実際にコムニは若かった。外見だけなら。そして、それはドリアンが壮年であるのと比べても、まだ異常に思える若さだった。

「どういう意味」

「さあ、どこからお話したらいいでしょう」

ドリアンがストーブの横で椅子に腰かける。コムニは手を下ろし、サラに横顔を向けた。スト

ーブの中で薪がはぜる音がし、顔の向こう側は暗闇に溶けて行く。

12. 船上にて

「たとえばあなたが最初の一人ではなく、最後の一人でもないとしたら、あなたは自分が何か違うことをしたと思いますか」

微かに軋むような音がする他は物音はどこか遠くへ消え失せ、サラ達の周囲に見当たらない。コムニの言葉はひとつひとつが時間を越えて届くようだった。どこか遠くから、投げかけられているように。あるいは、投げかけられたまま宙に浮いた独り言に、不意に出会ったかのように。

「それとも、何も変わらないと言うのだろうか」

あの時のように。

「五十年前、あなたはやはりアダムを探していました」

サラの手は知らず尻ポケットの財布に伸びた。

「いや、正確には、あなたのママが、と言うべきか」

「どういう意味」

「あなたは、初めて地球を旅するアダムじゃない、ということです」

ごく当たり前の事実のようにコムニは言った。実際に、コムニとドリアンにとってそれは当然の前提でしかない。ジェイクが腰を浮かす。

「待ってください。五十年前ってどういうことです。今はインパクトの直後じゃないんですか」

「違います。少なくとも、三百年は経っている」

骨格標本がぎこちなく揺れた。笑っている。

コムニは暖炉に薪をくべる。茜色に火照っていた古い木が黄色く光りながら崩れた。

「それにしちゃ、暖かすぎるんじゃないですか」

「厚いビニルに覆われた地面は、何もない場所より、はるかに暖かいでしょう。地球はまるごと、雲に覆われた。その下で発生した熱が、いまだ放出されずにくすぶり続けているのです。恐

らく、予想外のことでしょうが」

「信じないわ」

サラの記憶の中を大きな砂嵐が通りすぎる。ざらついて、すべてが一瞬で灰色になる。

「あたしはハリソンフォード・スクエアで目が覚めた。衝突前に、そこに立っていたからよ」

「それが本当にあなただったと、あなたは証明できますか」

「あたしが言ってんのよ。あたしの記憶だわ」

どこにも欠落のない完全な記憶だ。

「そして目が覚めた時から、オーダーにだけ従ってきた。三百年の入る余地なんてない。存在したのは九十四回の暗い朝だけ。これが事実よ」

「事実は恐らく、あなたの記憶はあなたのものではなく、アダムのものだということでしょう」

「何が言いたいのか」

ジェイクが不意に視線を上げる。

「あなたは衝突前から存在したアダム、一人目のサラではない、ということです。ハリソンフォード・スクエアで気を失ったのは、そしてハリソンフォード・スクエアで最初に目を覚ましたのは、オリジナルの、サラ・マクルーハンだったのであり、あなたではない、ということです」

「サラはあたしよ。あたしがサラだわ！」

靴を鳴らしてサラは立ち上がる。

「あたしは今日初めてあんたに会ったし、今日初めてあんたと話した」

長く伸びた影が大きな軌跡を描いて動いた。

「あたしが誰かなんて、あんたに決めてほしくない。ほっといて」

「あなたを引きとめたいんですよ。私たちは」

それまでコムニの影に沈んでいたドリアンが、不意に前に出る。

「おめえを向こう岸に渡したくねえんだわ」

「邪魔する気なら失礼するわ。ジェイク」

立ち上がった骸骨アンドロイドを制するように、ドリアンが言う。

「待てよ。話を聞け」

「必要ない」

「シティに渡ったら、おめえ、殺されるぞ」

「死ねってオーダーなら死ぬだけだわ」

「わかっていますか。死ぬのは、あなたです。アダムでも、サラでもなく、あなたの存在が消えるということです」

サラの中で何かが弾ける音がした。

「サラはあたしだっつってんの。存在しなくなるならどうだっていうの。存在し続けることがそれほど大事なことなの？邪魔しないで。あたしはただオーダー通りにママに会いたいだけよ。これはあたしのオーダーで、あんたらのじゃない。そのためなら死んだって構わないわ。ほっといて！」

手近にあった火掻き棒を手にすると、サラはもう一度言う。

「ついてきたら殴り殺すわよ」

暗闇に消えて行ったサラを、ジェイクが無言で追った。取り残された一羽と三人は、視線を床に落とした。

「おい、酷くなってねえか」

「仕方ないです。もともとそういう性格なんでしょう」

コムニはもう一度、視線をルイに向ける。

不意にピギーが羽ばたき、頭上をひとめぐりする。

「そろそろあなたも正体を見せてくれてもいいんじゃないですか」

「やれやれ、筒抜けか」

ピギーが暖炉の上で羽根を膨らませた。両腕をカウチに広げ、しっかりと腰を下ろした少年は、先ほどまで小さく身を縮めていた影とは、似ても似つかない。

「消去法です」

「なかなか快適だ」

「今回も手ごわそうですね。見込みはあるんですか」

「あいつ次第だねえ」

ルイは腕を伸ばしてピギーを捕まえる。

「ロクシィってのは回りくどいのがオハコかい」

ドリアンが大声で笑い、部屋が大きく揺れた。

「お手並み拝見だ。君らももう少しやりようがあったらうに」

「すみません」

「まあいいさ。お嬢さんはだいぶ混乱してきてる。あと一押しだろう。うまく引きとめられなくても、僕と一緒にシティに入る」

「それですが、私たちも一緒に行くわけにはいきませんか」

「最悪、それでもいいだろう。だが、最悪の場合だ」

「最悪ねえ」

大きな影の中で、鈍い笑みが閃いた。

「何が最高で、最悪か、誰が決める」

「僕は総体としての人格でしかない。すべては流れの中にある。アダムも例外じゃない。あらゆる力が、アダムの暴走を阻止する方向にいつている。そういうことだ」

「アダムのあれは暴走か？」

「異常事態であることは確かだなあ」

「止めるのはおめえの意志じゃねえってことか」

「違うねえ。強いて言えば、総体の意志だ」

「バランスですよ」

コムニは大きく呼吸をした。

「人間にとって、もっともよいバランスを探さなければ。今の状況がベストだとは、私にはとても思えない」

「同感だ」

「ふん、人間の俺から言わせりゃそういうのを余計なおせっかいてんだ。せいぜい知恵を絞るとけ。寝るぞ」

ドリアンは軽々と動かした扉を、音もなく閉めた。小さな影が二つ、暖炉の前で向き合っている。少年の瞳が楽しげに踊る。

「ロクシィはどうやって恋を知った」

「神がそのように作りたもうたからでしょう」

「だとしたら、人間が恋を忘れることはないだろうな」

「神が存在していたとして、でしょう」

「うまくやってくれ」

ルイの目蓋は不意に閉じると、静かにクッションに横たわる。コムニの唇から、ため息の音声が漏れた。歳月を経てもなお残る胸の奥のうずきのようなものが、恋だと言ったら、“彼”はどんな顔をするだろう。

「ただのノイズだと言うのかな」

だとしても、それが存在の動機になるのなら、従うしかあるまい。

13. 呼びに行く

「おい、待てよ」

煌めく星のひとかけらもない夜の下で、サラは火掻き棒を手に佇んでいた。ヘーゼルの瞳が微かに動き、ジェイクの影を認める。

「こないでって言ったでしょ」

「恋愛のプロをなめんな」

「骸骨のくせに」

ジェイクはサラの視線を辿り、同じ海を見つめた。

「サラはあたしよ」

「そうだな」

「誰が何と言うと」

「間違いない」

火掻き棒を握る手に力がこもった。

「馬鹿にしてんの？殴るわよ」

「アダムって変わってんなと思ってさ」

サラの髪を風がゆっくりと押した。

「オーダーがすべてだろ。なんでそんなに自分に固執する」

「あたしのオーダーだからよ」

現れた目が真っ直ぐ海の向こうを見ていた。

「このオーダーをやるのはあたし。あたし以外にはできない。そのあたしがサラなら、他にサラはいないわ。そうでしょ」

薄く痕跡を描く骸骨の方を見る。

「たとえば僕は」

ジェイクは口を動かして言う。

「ロクシィだった。僕は今でもマリアのことを愛しているし、それ以外のことはできない。でも、僕は知ってる。それは、僕がロクシィだからだ」

「あんたはジェイクでしょ」

「僕はジェイクだ。でも、僕はロクシィでもある。そして、僕はジェイクであることよりずっと、ロクシィであることのほうに、誇りを感じるんだ」

視線は見えなかった。

「総合的なツールとして開発されたロクシィであるということ。あらゆる人間的な反応を与え、人間にとって最大の幸福をもたらさうるロクシィであるということ。僕は、そのロクシィであるということさえ揺るがなければ、ジェイクという僕個人がどうなろうとまったく構わない。だから不思議なんだ。君が、どうしてサラであることにこだわるのか」

「同じことよ。あんた、怒ったでしょ。キモいって言われて。それはなんで？ロクシィであることの根っこを否定されたからでしょう。美しいロクシィ、完璧なロクシィ」

あらゆるものの望みの具体だった。

「自分の信じているものが、確信が、間違いだと言われて、他人のものだと言われて怒らないやつがいる？ たったひとつ、信じているものが、根っこからひっくり返されて、平気でいられるやつがいるなら見てみたいわ」

「でも、君は現にこうして僕の目の前にいるわけだし」

サラはゆっくりと振り返った。

「僕と話をしているわけだ。それなら君が目にしたことも、君の記憶も、たとえかつて誰かのものと重なっていたとして、今から君が目にするものは、君のものだろ」

「すべてを確信に変えるのに必要な年月はどれくらいかしら」

「さあ、三百年くらいかな」

火掻き棒の先がジェイクにつきつけられる。

「笑えない」

「僕もだ」

両手を上げたジェイクの前から鉄の先端が去った。

「ふん、要は諦めろってこと」

「違うよ。過去が変えられないから、未来を向くしかないってこと」

「でもその未来はもう消えたじゃない」

「三百年前に消えたはずの未来が今まで続いて過去になるなら、とりあえず、もう少し続きそうな気はしない？」

「そう言って絶滅しかかったんでしょ」

海は暗かった。正体不明の音がずっと聞こえ続けている。不意にジェイクの顎から笑い声が漏れた。

「君のこだわりは僕よりずっと人間的だ」

「あんたが言うのと皮肉にしか聞こえない」

風がぴたりとやむ。

「冷えて来た。戻ろう」

「戻る？どこへ。ミッションは途中だし、あいつらはあたしを邪魔してくる。船もない。お手上げよ」

「でも」

細い指が柔らかな指を掴んだ。

「アダム型は環境変化に弱いんだ。風邪をひくよ」

「あんたの手の方がよっぽど冷たいわね」

千切れそうに微かに繋がった二つの影は、ゆっくりと暗闇から遠ざかる。

*

「俺らの要望は簡単。アダムを助ける。そんだけさ」

ドリアンは大きな欠伸を見せながら言った。薪のはぜる音だけが続く。

「シティに着いた時に、あなたがどうなるのか私にはわかりません。でも、五十年前に会ったアダムはあの中へ入り、以降一度も出てきませんでした。そもそも、シティに誰かが出入りするところさえ、目にすることはなかった。シティはただあそこに存在しているだけです。アダムと共に」

「ご心配痛みいるけど、あたしは諦める気はないわよ」

「絶対に？」

「絶対に」

コムニは大きく二回頷いた。

「いいでしょう。船は出す。その代わりに、私たちも同行しますよ。あなたを見殺しにするわけにはいかない」

「酔狂ね」

「まあ、そうなのでしょう」

笑い声が薄い唇から洩れた。いくつかの真実が明らかになった、短い話の後で、コムニは懐かしそうに再びサラに手を差し出すと、ハンドルを握り続けた指を掴んだ。

「ほんとうに、面白いほど変わりませんね。あなたは昔から」

「あんたが会ったのはあたしじゃないってば」

サラの呼吸はわずかに早くなったのかもしれない。

「気安く触らないで」

柔らかな手を、サラは振り払う。

「そうですね。すみません」

コムニの手は再び車椅子の肘かけに戻る。いくつかの呼吸が再開され、時間が戻った。

「ひとつ聞くわ。シティがなくなったらママはどうなるの」

「どうもしませんよ。ただの」

挟んだ呼吸が僅かな切れ目を文に刻む。

「アンドロイドに戻るだけです」

「それって今とどう違うのかしら」

「たいして、違いますね」

コムニの視線はジェイクと交わった。

「今日はもうお休みください。詳しいことは明日、お話ししましょう」

火のはぜる音が、言葉のお尻にピリオドを打つ。

*

“「ケイトのモスキート・ショウ、お送りしてまーす。とーってもいい曲ね、ジョウイ」

「ありがとう。僕も気に入ってます」

「ねえどうしてこの曲「ピーチフル・ワールド」って名づけたの？なんだかちょっと、イメージが違うみたいだけど」

「ピーチって瑞々しくておいしいものでしょう？この世界が僕たちにとってもそうなればいいなって」 “

「部屋は自由に使っていいぜ。朝食は毎朝六時。時計は壁に掛かってる。参考にしてくれ」

ドリアンの低い声は、小さな部屋ではことさら大きく響く。サラはシャワールームに無言で飛び込んだ。ルイは白いシーツがかけられたベッドに全身を伸ばして横になった。ピギーがその様子をベッドサイドで観察する。部屋は清潔に整えられていたが、どこかから軋むような音がし続けている。窓はなかった。

ドリアンの顔に僅かに鉛色の影が差し、ピギーの羽音が室内に軽く揺れる。

「あの船にはどれくらい人が」

「数千ってとこだ。正確な人数は知らねえが」

「あなたたちも船の住民」

「最下層民だな。執行部はここまでは把握してねえ。漂着したやつらが勝手に住んでるブロックだ」

いくつかある候補を回った後で、ピギーは結局ベッドサイドに落ち着いた。

「それにしても驚いた」

ドリアンが震えるような大声で笑ったので、今度は部屋全体が揺れたようだった。

「おめえが言うと、えらく笑えるな」

「僕はあなた方を完全に信用しているわけじゃない。あなた方と船との関係もよく知らないし、シティについての情報も、今のところ限られている。ましてや、さっきの話だ。ただ、差し当たって他に手段がない。それを分かっておいてください」

「構わねえよ。俺とコムニはアダムを無駄死にさせたくないだけなんでね」

「それなんですけど」

ベッドの軋む音が消え、背を向けていたドリアンが振り返る。

「どうしてそんなにアダムに執着するんです。非常に平凡な、ありふれたアンドロイドだ。人間の手間をかける価値もない、使い捨てだったはずだ。放っておいたところで、あなた方には何の影響もないでしょう」

「そりゃあ、衝突前ん話だろ。今じゃアダムほど世界にとって重要な存在はいねえよ」

「それだけじゃ、よくわからないな」

「落ち着いたらさっきの部屋に行ってくれ。コムニが話してくれる」

「ありがたい。僕も伺いたいことがたくさんあります」

「それと嬢ちゃんが上がってきたら俺の部屋に寄越してくれ。俺も聞いてみてえことがある」

「伝えておきます」

ドリアンは軽くウィンクをすると、さっさと部屋から出て行った。ジェイクはウィンクの意味を考えながらベッドを見る。寝転がったまま眠ってしまったらしい。ルイが寝息をたてていた。目を上げると、枕の上ではピギーが丸くなっている。薄く目蓋を閉じたピギーを見ながら、ジェイクは小さくため息を吐くふりをして、やめた。誰も見ていない。

14. 別れ道

“「ハイディ・キラの『オールモスト・ナッシング』お送りしました！いつ聴いてもいいわね、ハイディ」

「僕も、リバーサルの前から好きだな」

「この歌では「あなた以外はほとんどぜんぶなくなっちゃう」って歌ってるけど、今じゃほんとになにもなくなっちゃったもんね。ハイディもびつくりだわ」

「でも、僕も君も生き残ったよね」

「そう！もちろんモスキート・ショウを聴いてくれてるラジオの前のあなたもね！」”

繰り返されるショーの合間、濡れた髪をタオルで巻きあげ、棚からボディクリームを取り出す。ジェイクは少年の顔を覗き込む。

「寝てる」

サラが腕を動かす度にクリームにつけられたハーブ臭が部屋を満たしていく。

「不思議だな。眠るってどんな感じなんだろ」

「休憩でしょ」

「でも、眠ってる間は夢を見るんだろ」

「さあ。あたしが知るわけくない？」

サラはゴミ箱に空いたパックを放り投げた。

“「ありがとう！それじゃもう一曲挟んで、いよいよ反転の日について聞いちゃいます！今回は、もちろんジョウイの「ピーチフル・ワールド」！」”

チープなステレオから響く、ジョウイの溶けそうに甘い、甘い歌声。チープなメロディ。そこへジェイクの擦れたようなひび割れた声が重なる。

「僕たち」

迷子みたいだ。世界の中で、たったひとりで。迷子みたいに、彷徨い歩く。でも、君がいるなら、きっと、きっと、きっと。

「好きねえ」

「そういうわけじゃないんだけど」

バスタオルを解いてゆっくりと髪を梳く。

「コムニの話は信じていいのかな」

「嘘を吐く必要がある？」

「何か、引っ掛かる」

「邪魔してくれなけりゃ、なんだっていいわ」

「シンプルだね。コムニが僕らを使って人間を害そうとしているなら、僕は彼の意志には従えない。いま、その可能性を考えてる」

「オーナーが死んじゃうと大変ね」

「今のマスターは一応君になるんだろうけど」

ジェイクの細長い指がサラを指し示す。

「へーえ」

「僕を助けたのが君だから」

「ご愁傷様」

タオルで乾燥しきれなかったサラの髪が、露出した肩を濡らした。

「なら、尚更悩む理由なんてないじゃない」

「なぜ」

「あたしはあたしのオーダーに従う。あんたはあたしのオーダーに従う。あたしはママに会う。あんたはその邪魔をしない。シンプルよ」

「コムニとドリアンのは」

「あたしはママに会えればいい。邪魔してこないならあいつらのことはほっとけばいい」

「わかったよ。わかった。君は本当にシンプルだな」

「ありがとう」

サラは唇を均等に釣り上げて笑った。

「褒めてないぞ」

「マリアってどんな人だったの」

「シンプルじゃないけど、聡明な人」

ジェイクは空になったチューブをゴミ箱に放り投げた。

「聡明で、綺麗で、不幸な人だった」

「不幸？」

「幸せの反対。嬉しくなくて、楽しくなくて、満たされていないこと」

「『ロクシィは完璧なパートナー』なのに」

表情があれば、ジェイクは苦い顔をしたはずだ。

「僕らはみなさんが思うより役立たずでね」

「わかんないな」

ジェイクは簡潔に言う。

「死んだら終わりだからさ、人間は」

「死んだら終わりなのに、不自由だわ」

少年が寝がえりを打つ。細い金髪は汚れ、額にへばりついている。白い肌のところどころに泥が跳ね、奇妙なまだら模様を作っていた。ピギーは食事を終え、再びベッドの背に乗りルイを見下ろしている。

「シェルターには二人で？」

「いや、僕一人。マリアは僕の代わりに地上に残った」

サラはジェイクを振り返った。

「馬鹿なの？」

「少しは口を慎めよ。シェルターは例の通り簡素で小さかった。入れる人数は決まっていた。マリアは僕を入れ、代わりに残った」

眼孔に落ちた影がゆっくり移動する。

「僕はいまでも、マリアがなぜ、僕だけをシェルターに入れたのかわからない。自分の都合で買ったアンドロイドを、自分自身を犠牲にして助けるなんてナンセンスだ。まず自分が助かること

が先決だろ。主人がいなけりゃ下僕は存在できないんだ。目的が存在しないのに、どうやって生き続けたらいいのかわかんないよ」

「それで結局まだ生きてるじゃないの」

「うん」

ため息は出なかった。

「君が見つけたからね」

ジェイクは腕を首の後ろに回すと少し上を向いた。

「あのままなら、今頃タイムアウトだった」

「文句があるなら着いてこなけりゃよかったのよ。どこまでも面倒なやつね」

「まあ、でも悪くないよ、夜の地球も」

ピギーは眠っている。

「太陽は眩しいだけだ」

15. 真夜中

驚くことも、恐れることも必要ない。それでも彼女を目の前にしたときコムニは確かに震えた。腋と背中から汗が吹き出し、神経が高ぶり動悸が収まらなかった。半世紀に一度幽霊のように目の前に現れる女。伝聞が増幅した影は濃く、光さえ歪む。

「何もかも奪ってしまえばよかった」

あの時に。机の上に置かれたコムニの手が忙しくなくブロックを積み上げては崩す。プラスチックのブロックはある高さまでは堅実に組み合わさっているのに、それを越えると、途端に僅かな誤差が致命的なミスになる。震えた手に掴まれたブロックは着地点を小刻みに計算し直す。最後の接触限界まで、無限に思える瞬間の分割が続き、だが、極限が訪れた途端にまた、崩れてしまった。「間に合うか」このまま狼に食べられるのを待っているわけにはいかない。だが次の手が確実にその一撃を防げるのか、それとも崩壊の呼び水になってしまうのか、判断をつけかねる。

「ジェイクです」

ドアの向こうから声がした。

「どうぞ」

コムニはブロックを箱の中へしまいながら応えた。ぎこちなく部屋へ入ってきたジェイクは、できる限り好意的な音声で会話することを試みた。実際にはそれは、つぶれ擦れた電子音以上のものではなかったが。

「遅くなってすみません」

「いえ、私もちょうど手が空いたところでした。お掛け下さい」

偶然のように佇む二つの影は静かに近寄る。

「来たわよ」

「女を誘う部屋にしちゃ悪かねえだろ」

目前に船の全貌が現れる。展望の為に三方ぐるりで配置されたガラス、拓けているのは衝突前に見た景色、いつか彼女がずっと見てきた景色だ。

「まあ座れ」

外気に埋もれる暗闇の中で、いくつもの光が点いては消える。大きく光っているものもあれば、小さく、弱弱しいものもあった。集まっているところもあれば、ほとんど黒々として何も見えない場所もあった。どれも雷鳴や薄暮の漠然とした領域ではなく、明確な点を形作る。そしてその点は、ある領域から外へは決して広がってはいかない。

サラの鼻先にガラスが差し出された。

「飲めないわ」

「飲めるようにしてある」

そう言って堅そうなソファに腰掛ける。

「下心丸だし」

「あたり。おめえの体に興味があんのよ」

エロジジイ
「助平爺が」

サラはドリアンの横に腰掛ける。脚元から伸びた床はガラスの向こう側まで続き、やがて散り散りに広がる光の中で、空まで繋がっていく。ドリアンはサラの顎を掴むと、瞳を覗きこんだ。

「助けたいって言うてみたり、興味があるって言うてみたり。いったいあたしの何が知りたいの」

「ちょっとね」

洗いたてで石鹸の匂いがするサラの髪を、感触を確かめるように握る。サラはドリアンのするに任せ、手渡されたガラスに少しだけ口をつけた。

「服を脱いでくれ」

「命令？」

「そうだ」

サラは着ていたものをすべて脱ぎ、惜しげなく裸体を晒す。灰明るい暗闇の中で肢体は白く浮かび上がる。重力があちこちに滞った脂肪を下へ引きずり下ろそうとするが、胸元についた二つの塊はまだ軽やかに抵抗していた。太い腕が伸び大きな腰を両手で支えるように触れ、所在なく揺れている白い腕を取り裏返す。手首から肘にかけてうっすらと青い血脈が透けた。

「そそる体だねえ、アダムてえのは」

脂肪に埋もれた血管に指が触れる。僅かに膨らみを持った青い線を辿っていた爪が、唐突にその管を圧迫し割いた。

「！」

鮮やかな緋色の液体が流れ落ち、サラはドリアンを跳ねのけ後退する。男の視線はサラではなくカーペットの一点に注がれ動かない。サラの腕から滴って床に小さな溜まりを作った、粘性の高い赤い液体、

「血だ」

「『第三条・自らを守れ』」

屈んだドリアンの上にサラが先に掴みかかる。だが、サラの力はドリアンにはるかに及ばない。反対に再び腕を掴まれ、ねじ伏せられてしまった。

「ひ弱だな」

「はなせ！」

「痛いのか」

ドリアンは笑わない。押さえつけたまま無表情にもう一度問う。

「痛いんだな」

同時に太い親指が、もっと深く傷口をえぐった。血はドリアンの掌を伝い、肘まで滴る。サラの全身は痙攣したが声はなく、呼吸を荒げ、親指を強く握りしめた。

「痛い。痛いんだってば。離して」

「やだね」

そう言ってドリアンは自分の指に付いたサラの血を舐めた。味雷の捕えた味は、

「鉄臭いねえ」

舌を離れた左腕でサラの両手をまとめ、右腕で腹部を押し、撫で、握る。歯、喉、耳。首から乳房、肋骨をなぞり鳩尾を押し、骨盤の内側を押えた。腿を抱えて体ごとひっくり返すと、背骨、臀部、を同じようにして触った。最後に肛門と膣に指を押し入れ喰る。女の体。髪の一筋から内部の襞に至るまで完璧に仕上げられた女の体。

「まったく、何がアダムだ。ただの女じゃねえか」

だが女であることより重要なことなど存在しない。

ドリアンはサラの首筋に手をあてた。

「やっぱり心臓がねえな」

「何の話」

ドリアンはサラの手を取り自分の左胸に当てた。力強い鼓動がサラの掌を一定のリズムで押す。

「これが心臓だ。おめえにはこれがない。気づいてたか」

「どうっでもいいわ」

「ところが俺にはどうでもよくねえんだわ」

腕の力が緩む。

サラは重そうに体を伸ばすと、すでに拘束の意志を失くしていた腕を払いのけた。

「ご満足？」

「感無量さ」

ドリアンはため息を吐いた。

「ため息つきたいのはこっちよ」

「ま、いきなりで悪かった」

太い腕は力なく横たわったままのサラを抱え上げると、シャワールームに運び込み、バスタブにサラを置きいれると強張ったままの腕を取り、湯を流した。

「言ってくれれば、いくらでも見せたのに」

「それじゃわからんこともあってね」

青ざめた肌の上にこびりついた血のぬかるみから傷口が現れ、流れ落ちた汚れは排水溝に吞まれていく。細長い筋を描きながら、サラの肌から柔らかなルビーがいくつもこぼれ落ちた。

「第三条ねえ」

「いきなり傷つけようとするからよ」

「おもしろえ女だ」

「ただのアンドロイドだわ」

破裂するような笑い声がバスルームを揺らした。

「血を流すアンドロイドか。こりゃあいいや。新機軸だな」

実際に、アダムはかつて、新しいアンドロイドとして暗い人気を博したのだ。やがて形のないルビーが配管の向こうへすっかり消え去る。

サラは放り投げられたバスローブを羽織った。ドリアンの手元には包帯が握られている。

「処置してやる。こい」

「勝手に治るわ」

「んなわけねえだろうが。いいからこい」

十分前にサラを押しえつけたのと同じ腕が器用な動作で傷跡を拭う。清潔なパッドを当て、テープで固定し、包帯を巻く。規則的な作業でドリアンの乾いた指先が皮膚に触れるたびに、その体温がゆっくりと浸透する。痛みを中和していく指の感触が、サラの感覚全体を鈍らせる。

その時、異変を訴えた唇からは声が出なかった。視野の奥で、ドリアンが何か話しているようだったが、何を話しているのかあまりわからなくなっていた。時間を追うごとに色彩が不透明になり、対象はばらけていく。顔、鼻、黒、歯、線、奥行き、平らかさ、動き、そして音。

「おい、どうした」

天井が回転し床に落ちる瞬間、訪れた砂嵐を彼女はどこかでみている。いつか、どこかでみていた。そう、あの時。ハリソンフォード・スクエアで隕石に吹き飛ばされた時、あるいはレイと話していたあの時。レイ。優しい男。レイ、弱い男。妻に疲れ、女に疲れた男。哀れな犠牲者。でもそれは、誰の記憶だったのだろうか。

16. 第二ラウンド

ようやく視界がはっきりして、まばらに髭の生えた顎を眺め、不自然に飛び出した喉ぼとけを眺め、それを周期的に覆い隠す胸板を眺めレイはこんなに毛深くなかったはずだと、唇が動きはじめたとき、下りてきたドリアンの視線と打ちあつた。その瞬間、レイはどこかへ消えていった。

「起きたな」

「寝てたの」

「気絶してたってえほうがいいだろうな」

視線の対象は、サラから窓の方へ移る。サラはその視線を盗み、やはり窓の外を眺めた。相変わらず無数の光が半円状に暗闇を欠き取っている。サラは頭を載せているドリアンの膝がしらに手を置いた。入れ替わるようにサラの額に置かれた手は温かかった。サラは腕を伸ばしてドリアンの顎に触れる。大きな骨が皮膚の下に埋まっている。その上を、まばらに剃られた髭が覆っていた。

「なんでそんな顔してんの」

「どんな顔してりゃ満足なんだ」

「嘘つきと隠し事は嫌いよ」

「ふん、ただのお人形ってわけでもないらしい」

唇が等しく開かれた。

「あたしと寝てくんない」

「随分いきなりだな！」

「今思い出したの。ミッションなのよ。あたしあんたと寝なくちゃママに会えない」

「それなら尚更お断りだ」

「そんなこと言って、いいのかしら」

サラは起き上がると捲かれた包帯を解いた。傷口は既に薄い跡になっている。それに目を留めたドリアンが再び腕を取ろうとするが、僅かに届かなかった。

「ほらね、包帯なんかいらないわ」

そうしてサラはさも可笑しそうに笑った。ドリアンが頬を引き締める。

「どうも随分勘違いしてたらしい」

「知りたいならあたしと寝て」

「取引しようってのか。ふざけんな」

ドリアンが腕を上げ指を動かすと再び部屋の照明が消え、景色が暗闇を伴って侵入してきた。

「徹底的にやるのが俺の流儀でね」

「第三条は守ってもらうわ」

「さて、自信がないな」

第二ラウンド。

*

薄暗がりの中で目を覚ます。誰もいない。枕元でピギーがうずくまっていたが、ルイが体を起こすと羽ばたいて窓に留まった。

「誰もいないね」

ピギーは何も言わずに羽根を膨らませる。

「君はどうしてサラと一緒にいるの。僕と同じように拾われたの。買われてきたの。捕まったの」

小刻みに首を動かすピギーにルイは話しかける。

「君は僕たちの言葉がわかるの」

鳥類特有の無感動な瞳を見ながら、ルイは飽きずに話しかけた。

「サラはママに会いたいんだって。僕もママに会いたい。僕のママは僕のせいで犬になっちゃった。ねえ、見て」

ルイは自分の手をピギーにかざしてみせる。

「ここ、少し光ってるでしょ。ここで信号をやりとりしているんだって。ちょっとあったかいよ。触ってみる？あとね、僕の筋肉は特別なんだって。僕の心臓の筋肉も、特別なんだよ」

ピギーが小さく首を縮めるのを見てルイは笑った。

「変なの」

柔らかな手がピギーの背に触れようとした瞬間、大きな衝突音と共に小部屋全体が揺れた。ルイは素早く起き上がりドアに走る。

「なんだろう」

開けたドアから小さな影がするりとぬけ出す。その後を慌てて追いかける。

「待ってよ、どこに行くの」

無言のまま、灰色の鳩は飛んでいく。

*

深く影を抱え込んだ頭蓋骨の奥で、赤い光が揺れる。

「単刀直入にお尋ねしますが、グランド・プログラムのことを聞いたことはありませんか」

「いえ」

「それではシンクについては」

ジェイクは空っぽの頭を左右に振った。

「僕はサラに見つけられて、そのままここにいる。衝突後の、あなた方の世界のことは何一つ知りません」

「いいでしょう。最初からお話したほうが？」

「お願いします」

夜は静かに佇む。窓の外は暗闇に沈み、夜明けまではまだ六時間ほどを残している。狭い部屋の中にさまざまな物が詰め込まれていた。それらが暗闇を背負って中央のストーブに覆いかぶさるような洞窟を作る。

「あの日は、地球にとって、大きな出来事ではなかったでしょう。でも、人類にとっては非常に致命的な出来事でした。あらゆる生命は焼きつくされ、海に沈み、光が消えると共に消えた。人類は地を這うようにして、僅かに生き延びたにすぎなかった。しかも、あのときは本当に、未来など誰も想像しなかったでしょう」

コムニの声は再び遠ざかっていく。時間を逆行し、いまいるコムニの形が何百もの影を背負っているかのように後退する。

「あなたのような、高度なアンドロイドを産んだ文明は、完全に途絶えたと思われました。コンピュータのネットワークは寸断され、そもそも、存在する理由を失ったアンドロイドはたとえ動くことができても、機能しなくなっていた。あなたのように、誰かが見つけるまでは埋もれたままで。でも、混乱した、いや、絶望しきった世界の中で、いくつかの可能性が生まれました。生命の存続ということの、いくつかの可能性が。ひとつは物理的アンドロイドによる都市再建と残存人類の存続、もうひとつは、コンピュータネットワークの高度化、そしてもうひとつは、新しい生殖の形としての複製です」

「一つ目は、ジョウイですね」

「二つ目が、グランド・プログラム、そして三つ目が、アダム・システムです」

「アダム？サラですか」

「そう」

やはりどこからか、軋むような音が聞こえる。

「あなたは、自分の自意識がどのように作りだされているかご存じですか」

「ある程度は」

「それなら、想像できるでしょう。ネットワークそのものが自意識を持つということが」

「グランド・プログラムですか」

「そうです。二つ目の可能性。あらゆるアンドロイド、オーナーやマスターを失ったアンドロイドのネットワークが、複雑に集合するにつれ、形成された、いわば偶然の産物です。いま、存在しているアンドロイドの大半はこのプログラム下にあると言っていいでしょう。彼らは、彼らの為に存在しているのです」

「それじゃ、もうオーダーは必要ないのか」

「自らの内の何らかの調整の結果が、オーダーになると言うほうがいいでしょう。ある時点から、存続の目的を失った時から、というほうがいいかもしれませんが、ネットワークはネットワー

クの存続そのものを目的とするようになりました。あらゆる他の生命と同じようにね」
「だとすると」

ジェイクは少し姿勢を変える。

「サラはちょっと、イレギュラーでは」
「同じことです。彼女たちは、インパクト以降独自の繁殖を繰り返しました。その結果、グラ
ランド・プログラムとは別のネットワークを持つにいたったというわけです。おかげで、やはりオ
ーナーやマスターとして人間の存在を待たなくても良くなった」
「だとしたら、アダムは何に奉仕しているんです」
「ご想像通り、アダム自身に」

ジェイクはゆっくりと腰を掛け直した。コムニに向けられているはずの赤い瞳は、視線の方向
が曖昧なままだ。

「アダム自身に」
「そうです。アダムは人間に奉仕するアンドロイドではなくなった、ということです。それは、
ある意味で必然だったのかもしれませんが。人類の消失は、アンドロイドにとって、大きな転換を
余儀なくした。彼らは、自ら目的を産まなくてはならなくなった。いつまでも消失せずに済む目
的とは、なんでしょう。そう、永続ですよ。アンドロイドは、アダムは、正確に、人間と同等の
存在者になりました。そして、シティを作った。自分たちの為に」

ランプの明かりが微かに揺らぎ、コムニとジェイクの影を壁に散らした。部屋の四隅は暗闇の
中に沈んでいる。

「ただ、第二の可能性と、第三の可能性の間には、決定的な差異があります。グラランド・プログ
ラムは他者を排除しない。むしろ、広大な裾野を持つ緩やかな繋がり自体がその根源にあります
。そして、根源的に、人間に対する義務を負っている。だが、アダム・システムは、アダムしか
許容しません」

「でも、じゃあ、ジョウイや他のアンドロイドは、シティに集まっていたはずの他の生命はど
うなったんですか」

「もちろん、排除されました。一番最初に、最初の十年の間に、すべて」

大量のアンドロイドがシティを追放された。そしてまた、僅かに生き残った人間も、シティに
住むことを許されなかった。

「だからシティは、あの日から今までアダムの街なのです。アダム以外の者は入ることもでき
ない。インパクトの後で、世界はあの街を中心に動いているようにさえ思える。いや実際に、世

界として機能しているのはあの街だけかもしれません。そしてある種の儀式として、つまり世界を続けるための儀式として、ですが、アダムは半世紀に一度、生まれ変わりの為に旅をするようになった。ちょうど、今のサラのように」

「なんですって」

「生まれ変わり。先ほど御覧頂いたように、本人は否定するでしょうがね」

「その言い方は比喻ですか」

「アダムはおそらく、あなたが意味するアンドロイドとはずいぶん違うものになってしまった。彼女たちは、完全なる複製として存在しています。三百年前から、途絶えることなく」

コムニは屈めていた体を不意に起こした。

「先ほどもお話したとおり、ミッションは彼女が向こう岸へ渡れば、おしまいです。ですが正直なところ、向こう岸へ渡るのは非常に大きなリスクを伴います。アダム以外の者すべてに」

「それでも行こうと言うのでしょうか」

「グランド・プログラムは、アダム・システムを許容していません。おそらく暴走だと捉えているのでしょう。これまでも、プログラムによるシステムへの攻撃は何度も見られました。たとえば」

再び呼吸が間奏を挟む。

「ほぼ確実に、ルイの行動はプログラムの支配下にあるはずですが、そうでなければ、人間が偶然あの場に存在できたはずがない」

「彼がサイボーグであることと何か関係が？」

「わかりません。“彼”は我々と定期的にコンタクトを取ります。彼によると、存続した集落はここだけではないらしい。ルイは、おそらくその中の一つから選ばれているはず」

ストーブの中で火のはぜる音が小さく鳴った。

「でも、僕はそのグランド・プログラムにはまったく気づかなかった。もし、衝突前と同じようなネットワークが残っていたら、何らかの機会にひっかかったはずだ。あるいは、向こうからアクセスがあってもおかしくなかったんじゃないですか」

「それはあなたがすでにマスターを持っているからでしょう」

「いえ、僕のオーナーは既に死んでいます。サラが、マスターだということなら、そうかもしれませんが、それが、僕をネットワークから排除する理由にはならないはずだ。コムニ、何か隠していませんか」

コムニは不意に顔を上げた。

「私は何歳に見えますか」

「せいぜい三十歳にしか見えませんよ」

「実は、その十倍は年寄りですわね」

滑らかな肌が炎に照らされ浮かび上がった。

「あなたと同じです。ジェイク、私はロクシィ、アンドロイドでした」

「番号は」

「ナンバー6」

「ジョウイ、そんな、顔が違うじゃないですか」

コムニは口を開く。流れてくるのはあの歌、チープなメロディ。

“僕は迷子、彷徨い歩く。君がいてくれるなら、きっと、きっと”

「衝突の日を、私は生き延びました。オーナーが親切にもかなり頑丈なシェルターに入れてくれていますわね。シティの建設に最初に取りかかったのも、ご存じのように私なんです。でも、うまくいかなかった」

コムニの瞳はジェイクを見ると微笑んだ。

「長いこと漂流して、流れ着いたのがここだった」

「この船はあなたが？」

「いや、生き残っていた人間たちが、長いことかけて作り上げたようです。私はここに辿りついた頃にはすっかり肉を失ってましてね。今のあなたと同じだ。肉のないセックスアンドロイドなんて、何の役にも立たないでしょう。がらくたですよ」

「コムニ、話を戻してください」

「いいえ、ジェイク。必要な話です。私たちは人間に近づきすぎた。人間を越える超人的な力は、人間に近づくことでほとんど失われてしまった。少し頑丈な体だけが残ったというわけです」

コムニは自分の乗っている車椅子を見下ろす。

「この体は、もともとドリアンの息子のものでしてね。人間に見つかってスクラップされそうだった私を、ドリアンが助けてくれたんです」

「その息子はどうなったんです」

「死にました。死んでいたから、私が代わりに入れたとも言えます」

コムニの差し出した白い手を取る。脈がなかった。

「ドリアンはああ見えて手先が器用なんです。私の中枢をうまく神経に接合してくれました。今はコムニです。文字通り心も、体も。まあ相変わらず歩くことが出来ないんですが」

車椅子は静かなモーター音をさせて後へ下がった。ジョウイは生まれたときから歩くことができなかった。そう望まれたから。そして未だにジョウイは、その呪縛から逃れることができない。

「技術が必要です。肉体を保つことのできる技術。そしてその肉体を支えられる骨が。シティに渡るとは、あなたにとっても大きな利益となるはずですよ。私たちは、再びあの頃のような体を、いえ、もっと自由な体を手に入れることができるかもしれない。ジェイク、あなたをグランド・プログラムが招かなかつたのは、あなたが新しい可能性を作りうる因子だからです。この滞った世界を、動かさう何かだからです」

「だからって、なんでもできると思わないでください」

ジェイクの音声は急に強張る。

「そりゃ、僕だってあの頃の体を思い出すことがある。僕が与えていたいくつもの満足のことを思い出すことが。でもコムニ、僕たちの存在は肉体だけじゃない。僕たちはたぶん、僕たちなりのやり方でオーナーを支えていたんだ。そしてコムニ、いや、ジョウイ。あなたがあの肉体を失ってもまだ、その弱い肉体にしがみつきながら、達成しようとしているのは、なんですか。誰の為のものですか。さっきあなたは、グランド・プログラムが根源的に、人間に対する義務を負い続けていると言った。それなら、あなたが存在するのはやっぱり、今だって、人間のためでしょう。僕たちは、みんな、オーナーのオーダーによって存在してきた。彼らの満足の為に存在してきた」

「さきほども言いました。私たちはすでに、オーナーとしての人間を失っています。もう長い間。私たちのオーナーはかつて人間だったかもしれない。でも今は、そうシンプルでもないのです」

「シンプルですよ。難しくしているだけだ。あなたにはミッションの達成に必要な意志があるのでしょう。それはあなたの意志だ。グランド・プログラムじゃない。僕だってオーダーに従う意思がある。オーナーが死んだって、オーダーは存在する。それなら、オーダーの主、マスターの為に生きることだってできるはずでしょう。僕は僕のマスターに従う。あなたは、あなたのマスターに従っているはずだ。なぜ、そのことを無視しようとするんです」

「私は」

コムニが次の言葉を継ごうとしたとき、小屋が大きく揺れ、窓からこれまでにない強い光が差し

込んできた。ジェイクの記憶の中で、太陽の光が煌めいた。いつか、頭皮を照らした熱。

だが、今彼らを照らすのは、それよりもずっと醒めた白色だ。ランプの炎は影を作り、視界から物質が消える。

「ああ、ドリアン、やりすぎだ」

窓に目を向けたコムニは小さくつぶやく。あまりに強烈な光の中でジェイクは唸った。

「なんです、あれは」

窓の向こう側から、背に溢れるほど大きな光の輪を背負った影が何体も連なり覗きこんでいたのだ。

「天使です」

「天使です、って」

チープな連想。ジェイクのデータベースにある天使は、みな二枚の大きな羽根を持っている。だが眼前に現れたのは、光そのもののように明るく直接見ることさえできない。

影をかざし姿を見出された天使たちは、二階ほどの高さにあるはずの窓からじっとジェイクとコムニを覗いている。コムニは手の平で視界を覆った。

「アダムのガーディアンです。彼女に万一のことがあると現れます」

「てことは」

「ドリアンには、後できつく言わないといけませんね」

「サラ！」

文字通り飛びあがったジェイクはドアに向かって無言で走りだした。

*

「なに、この子たち」

影が消えるほど異常な明るさが部屋を照らし出した。部屋を囲む窓ガラスが音を立てて割れる。微かな風と膨大な光を背負って、黄金の仮面をつけた天使がサラとドリアンの周囲を取り囲んだ。

「手を離さない」

五人の天使の一人がドリアンに命じた。

「へへ、やなことだ」

だが命令はすみやかに実行され、ドリアンは二人の天使の手によってサラから引き離された。腕に力を入れてみたが、天使たちの体はびくとも動かない。

「サラ」

声のようだった。だが、光のようでもあった。

「ミッションは終わりました。帰りましょう」

「どういうこと」

「ミッションは達成されたと認識されました。^{ジ・エンド}おしまいです」

「だって、まだなんにもしてない」

天使はサラの手を取りキスをした。

「この腕の傷」

天使はサラを抱き寄せた。

「あなたの心の奥についた傷。求めたこととはいえ、我々の許容範囲は越えています。これ以上こちら側に残る必要はありません」

振り返った視界は金色の甲冑に阻まれる。

「おやすみなさい」

柔らかな掌に撫でられた目蓋は静かに閉じ、崩れ落ちる体をその腕で支えると、すべての天使が一斉に部屋から飛び出していった。ひとつに集まった光は白銀に輝き、太陽よりも明るい。ドリアンは目を閉じていても眼球が光に晒され、服を着ているのに皮膚が焼かれるような気がした。

天使の群れは空の中を星のような速度で去り、後には再び冷えた部屋と暗闇だけが残される。

「参ったねえ」

割れた窓からは、覚えのあるサイレンが聞こえ始める。破裂するようにドアが開いた。

「ドリアン、何をしたんです」

一呼吸遅れてルイとジェイク、そしてコムニが部屋へ入って来る。

「予定がちと早まった」

「天使は予定になかったでしょう」

「そう怒んな。わかったこともある」

傍に寄ったコムニの平手がドリアンの頬を打った。

「そういう問題じゃない。あなたはジェイクに、私の二の舞を踏ませるつもりですか」

「俺はオーダー通りやったぜ。アンドロイドじゃねえんだ。完璧にやできねえさ」

「ドリアン、あなたは人間であることを言い訳にしすぎる」

「知ってる」

コムニよりも冷静に、ドリアンは言う。

「それよかさっさと行こうぜ。ここに長居もできん」

大きくなり続けるサイレンの傍らで、ルイは窓際に立ちすくむジェイクの傍に駆け寄った。

「ジェイク、ピギーがいなくなっちゃった」

「そりゃ吉報だね」

ジェイクの視線は天使の去った方角、真っ直ぐ南に向けられている。その先に、星のように黄金の光が輝く。

「勝手に置いてくなよ」

ジェイクの状態を記す言葉を、ジェイクは見つけられない。おそらく微かなノイズに過ぎない。だがいつまでも焦げ付いたように消えないノイズだ。

「ぼさっとしてんな。行くぞ」

サイレンの音に合わせて増え始めた人の声を避けるように、四つの影は次々に部屋を出る。最後の影が扉をくぐる直前、残された部屋の床に光るものを見つけて拾い上げた。奇妙に扁平な形をしたクロスだった。少ない光の中で、それは確かに天使と同じ輝きを放つ。ジェイクは自分の背骨からそれをかけると、再び走り始めた。

17. シティハ

地上にはない轟音が遠くから途絶えることなく流れ続ける。

海上に出て数日が経っていた。船からの追手は方角がシティだと知れるとすぐに離れた。「そりゃ、関わりたくねえよ」とドリアンが解説した。「シティ、即、死だ」船体は小さく、よく揺れる。止むことのない低音、見えない水中。黒くたゆたう水面は夜になるとますます暗く沈み、いくら覗きこんでも真相は見えない。

「おい、あんま乗り出すなよ。落っこちるぞ」

船尾から声がかかる。あの建造物に比べたら、実に頼りない船だ。だが選択の余地は最初からない。ジェイクとルイは船室に戻ると、カードの続きに戻った。

「コムニ、ずるしてない」

「してませんよ。ルイ、あなたの番です」

ルイは伏せてあったカードを取る。

「最初の約束通り、シティに着いたら別行動です。あとはご自分でどうにかしてください」

「わかってる」

「見ろ、もうすぐだぜ」

はじめは視界の端に映る小さな点に過ぎなかった光が、やがて近づくごとに、暗闇から権力を奪い支配を強める。黒一色だった水面には規則的に照明が配置され一定の線を象っている。上空はオレンジ色に染まり、それを支えるようにして、真っ白な塔が地上から何本もそびえていた。小さな船は光の島を避けるように脇へそれる。

「シティだ。人間にゃ一生近づけねえ」

「それに近づこうっていうんだろ」

「まあ、腕前とくにご覧あれってところだな」

船は光の中で小さな点でさえなくただ暗闇に同化する。ドリアンの何本も細い皺の刻まれた皮膚には、薄く髭が伸び、頬はたるんでいた。光の中でドリアンは、何歳も年老いた。一方でルイ

の頬はその光の下で更に輝きを増すようだった。コムニはあの部屋の中でも、この光の中でも何も変わらなかった。ジェイクが変わらないように。ジェイクとコムニの失ったものを、ドリアンとルイは二人とも、違う形で保っていた。

「天使です。気をつけて」

船室に座ったまま、外を見ていたコムニが言う。白い光の中にごめく金色の点、ほとんど瞬きの間の幻想のような儂い点がどれほど強力な力を持っているか。

「任せろよ。あいつらの守備範囲はわかってんだ」

「ならどうしてあのとき、簡単に彼女を連れて行かせたんですか。あれほど、私は気をつけてと言ったんです。やりすぎるなと言ったんです」

「落ち着けて。おかげでデータも取れただろ」

「天使のデータくらい以前からあったんだ。それよりアダムを連れて行かれたことのほうがよっぽど重大事ですよ。わかってるんですか」

「わーかってるって、わかってるわかってる」

「絶対、わかってない」

「つべこべ言うな、口閉じてねえと舌嚙んでえ死ぬぞ」

シティの光をいくつもの影が遮る。

「中入ってな」

浅瀬に入った途端に巨大な岩が行く手を阻み始める。ドリアンは慣れた手つきで舵を切るが、中に放り込まれているジェイク達にとっては過酷な状況だった。ルイはしばしばテーブルに頭をぶつけ、コムニは机にしがみついている。ジェイクは比較的身軽に体を固定していたが、ときどき頭蓋骨を天井にぶつけた。カードはすっかり床に落ち、不規則に二色の模様を描き出す。

やがて揺れが収まり、シティのある岸から小さな丘を挟んだ入江に船は着いた。

感覚に入るすべてが細部にわたり、これまでとは異なっている。均質な大地、等間隔に置かれた光、静寂、そして色彩。膨大な情報が混沌としたまま視界を埋め尽くす。後から後から降り注ぐ、頭皮を焼く熱。

「これこそがシティですよ。光こそシティの正体です」

「でもどうやってこんな大量の明かりを作りだしてるんです。どう考えても衝突以前のテクノロジーじゃない」

「三百年は新しい技術を産むには十分な時間でしょう」

軽い衝撃の後で、船が止まった。

岸に板を渡すと、ドリアンはジープを下ろした。

「まったく男しかいねえドライブなんざ楽しくもなんともねえなあ」

スイッチ。

“それじゃ次は、もちろんジョウイのあの曲、いっちゃいましょうか”

「この番組もいい加減飽きましたね」

「あいつらは飽きないんだろう」

歌を口ずさもうとしたジェイクが聞き咎める。

「どういう意味です」

「気づけよ。モスキート・ショウはずっと同じプログラムなんだよ。永遠にな」

「なぜ」

「アダム。全部アダム様のためさ。シティも、ラジオも、船も、世界中がアダムのためにあるんだ」

「ならなんでそのシティを破壊しようだなんて」

コムニがドリアンを見る。

「まあ、どうせ死ぬならなんかやってから死にたいだろ」

「技術は共有されるべきです。私たちは世界にもう一度バランスを取り戻したい」

「つまり？」

「女だよ、女」

「どう考えても真面目な話じゃなさそうだな」

「考えても仕方ねえな。本能ってやつだ。男は女を求め、女は男を求める。それが自然ってやつだ。だろ？わかったら飛ばすぜえ」

眠らないシティの光の中で、人もまた夜を忘れて走り続ける。

18. 光の街

シティへの道はひとつしかない。帰って来るアダムが迷わないように。舞台の上から強烈なライトが照らし、あらゆるものを浮き上がらせる。鮮やかな緑、その下に咲く花、梢から洩れる光、道に落ちる影、色彩の影。

「あれも、本物かなあ」

頭上は木々が覆い、空は見えない。見えないはずの空をジェイクは見ようとする。見えないはずの太陽と一緒に。目を焼く痛みはなく、ただ光の強さが頭蓋骨に浸透した。

シティ。光の街。地上に唯一残された生命の余地。シティへ行きアダムを探すこと。サラのミッション。終わりかけていた。

車が揺れ、ジェイクの胸でクロスが煌めいた。

「コムニ、僕が行くことは、サラにとってどういう意味を持つと思いますか。僕はサラに邪魔すると言われた。僕が行くことは、サラにとって妨害ではないんですか。なら、僕は、大人しくしているほうがいいのかもかもしれない。それがサラの望みなら、僕はそれを裏切れない。サラはママに会い、ミッションは終わって、限定的主従関係はもうじき解除される。そうなったら、僕のマスターはサラじゃなくなって、僕もそのグランド・プログラムってやつに組み込まれるだけ。めでたしじゃないですか」

三人の顔はじっくりとジェイクの方を見ていた。

「やれやれだな」

「オーナーの死が確実なら、あなたは自ら新しいマスターを選べたはずです。なぜ、今更グランド・プログラムに入ろうと？」

ジェイクに答えられるはずがなかった。それは感情で、感情はすべてマリアに捧げられるものと決まっていたのだから。

「三百年前、私はアダムを止められなかった。彼女は強烈な信念に取りつかれていて、それを取り除く術がなかった。五十年前、私は彼女をそのまま帰した。彼女の意志のまま。それは私の意志でも、グランド・プログラムの意志でもなかった。ただ、私は彼女の強い確信の前に、膝を折

ったにすぎません。あの時、もし彼女を帰さなかったら、アダム・システムは今頃なくなっていたかもしれない。私はよく、そのことを想像しました。あなたに、同じ思いはして欲しくない。彼女の意志、という言い訳に逃げてほしくない。あなたに押し付けるわけじゃないですよ。でも、たとえあなたがなんだろうと、今必要とされているはずの手を引っ込めることはできないはずだ。それになにより、あなたはロクシじゃないですか」

ジェイクに言葉はなかった。ただ、マリアの求めたプライドの高さがロクシという言葉に反応しただけかもしれない。美しいジェイク、誇り高いジェイク、完璧な望みの具体。

「でも僕は」

その存在のどこかがサラの存在と重なっていたのだとしても、それを言い表す言葉などない。だが彼女が名前を呼んだとき、彼の一部は彼女の中に埋め込まれた。だからジェイクはサラと離れるとき、あれほど全身が痛かったのだ。それはすでに自分の一部だから。

「僕の心はマリアに捧げました。でも僕の存在は、サラに持っていかれたままだ。僕はそれを取り返さなくちゃ」

「なんでこう、もっとシンプルにいかないのかねえ」

ドリアンが目が薄くコムニを通過した。ジェイクの眼差しが見えない空を見上げる。空の向こうの暗闇を見通すように。

だが木漏れ日は途切れ、空間は光で溢れ、その限界を見失った。「着いたぜ」

発光するボックス。シティの中核。降り立った脚は大地の上ではなく、何かの石のような固い質感を感じとる。

「まるで墓だなあ」

四人は向き合って笑った。だがその声がどこかへ吸い込まれて互いに届かないことにすぐに気づいた。コムニは懸命にジェイクに何か言っているようだったが、絶命寸前の金魚のように無闇に口を開けているだけのようでもあった。ルイは何かの声を聴いたように後を振り返った。ジェイクの視界の中で次第に三人の輪郭はぼやけ、形態を失った光そのものになっていく。色彩は闇と反対の方向へ消えた。頭上を見上げてももはや木々も、あるはずの雲も、その先の無限も見えなかった。ただ、光が全員を呑みこんだ。文字通り、彼らは光に溶けた。すべてが消える寸前に。

「走れ、ジェイク」

ジェイクは車を飛び降りて走りだした。その細長い陰はすぐに光に呑みこまれて見えなくなった。

「サラによろしく」

つぶやいた唇もまた光に溶けていく。

19. 夢か現

砂嵐のこちら側で、サラの意識は彷徨っていた。ミッションの狭間に広大な空間が口を開けていて、サラは初めて迷っていた。どちらへ行けばいいのか。どちらが未来なのか。ミッションの終結が無限に遠く見えた。

サラは尻ポケットから財布を取り出し、アダムの写真をもう一度見ようとした。だがあまりに年月を経た紙片はすでにふたつに破け、強烈な光の下であっという間にただの白紙に戻ってしまう。いくら目を凝らしても、もうそこにアダムの輪郭を見出すことはできなかった。もはや、網膜に映る姿がその面影を残すだけだ。やがて道は尽き、尖塔の麓へ出た。

サラは、硬い地面に立っていた。発光するボックス。シティの中核。

「まるでお墓ね」

残響。誰かの声がサラを呼んだのかもしれない。だが、音のように聞こえていたのが光だったと言うことをサラは後で知った。光と音は等しいノイズだった。発光の中でサラは方向を見失った。いま足の裏が何を踏んでいるのかも定かではなかった。音は光に呑まれ、感触は失われていく。感覚は麻痺した。ただ膨大な光の中でサラは彷徨った。方向が消えて存在が浮く。前が後になり、上は下になった。登っているようで、進んでいないようだった。

「そのまま」

だから声が聞こえたときもサラは、それが声だと認識するのに少しかかった。「そのまままっすぐ」と言った声はすぐに再びノイズの中に沈んだ。サラの唇は同じ言葉を繰り返した。そのまま、そのまま、そのまま、まっすぐ。彷徨い歩く、幽霊みたく。君がいなけりゃ、君がいなけりゃ。サラは笑った。君がいなけりゃ、私は迷子、君がいなけりゃ、彷徨い歩く、君がほしい、君がほしい、君がほしい。

「サラ」

同じ声。サラを呼ぶ声。ホワイトノイズから浮かび上がる声、光の中に不意に形を成す声、呼び声。サラ。

「呼んだ？」

立ち止った足もとが急速に重力を増す。

「呼びましたよ」

サラ。

「呼んでいましたよ。ずっと、ずっと。待っていました」

サラ。

光が晴れる。ノイズが消え、全面に視野が拓ける。

「サラ」

豊かな金色の髪、黒いドレスをまとった女。切り抜きから消えた女が抜け出した姿のままで再び現れる。

「おかえりなさい、サラ。よく戻りました」

「なんだか、そんなんばっかね」

向き合った顔は互いを映し合う。

20. ケイト

囁き合うような笑い声が広がった。均質な周波数、どこまでも等しい密度の連なりが聴覚を心地よくいらう。

「どれほど、この日を待っていたでしょう」

マイクロフォンを通さないのに明瞭な声は軽やかに広場一面に広がり花卉のように揺れた。

「今日は記念すべき日です。再びアダムが生まれる日。そして私たちが新たな仲間を迎え入れる日。とても大切な美しい日。サラ、よくここまでたどり着きました。長い旅だったことでしょう。多くの仲間と会い、さまざまな経験もされたことでしょう。私たちはあなたを待っていました。今日、私たちは再びあなたを取り戻しました」

耳元で拍手が弾け、振り返ると広場いっぱいには集まっているのはみな同じ女たちだった。同じ声で笑い、同じ声で囁き合う。大きくうねった金髪に長い肢体のぶら下がった黒いワンピース。サラは小さくつぶやく。

「アダム」

「ようこそ、サラ」

金髪は言った。

「心から歓迎しますよ。私はケイト。あなたの後見人です。戸惑っているのですね。わかりますよ。でもごらんなさい、あなたの姉妹たちを。あなたを心待ちにしていたのです。さあ、みんなに挨拶なさい」

「突然言われても」

「それでは手を振っておあげなさい。彼女たちの労をねぎらってあげてね」

言われたとおりにサラが群衆に手を振ると、さっきよりもずっと大きな歓声が全体からわき上がった。一方でそれは熱狂よりもずっと醒めた音色だった。来るべきものを受け止めるための準備された音色。

「けっこうよ。それではこちらへ。儀式の前にアダムに会っていただきます」

「あんたもアダムじゃないの」

「アダムを固有の名として名乗れるのは、オリジナルだけです」

振り返りもう一度広場を見る。膨大な数の女たち、膨大な、けれどいずれも違わぬ笑顔で囁き合う女たち。上空を光が舞っていた。黄金の仮面をつけた天使たち。彼らもまた、仮面の下には同じ顔を用意しているのだろうか。

うごめく女と光を見続けるうちに、サラは自分がどこから来たのか思い出せないことに気づいた。確かに光の中から声が呼び掛けたとき、自分が来た道のことを覚えていた。だが、今ではその記憶を自分で振り返ることができなかった。まるで見えない手が記憶の箱ごとどこかへ持ち去ってしまったように、大きな空白がある。

誰かがずっと一緒にいたはずだ。

「誰」

だが、確かに重なり合っていたはずなのに、もはや触れ合っていない。仄かに頬のあたりに残っていた残像は視野に取って代われ、やがてケイトとサラはアダムの部屋に辿りついた。

膨大な空間に残された部屋は天井の中央から垂れた柔らかな布で隠されていた。確かに誰かがそこにいるようだった。ただ視線だけが遮られている。幾重にも重なり合った布を潜り抜けるごとにサラはアダムに近づいていく。最後の布をくぐり終えたとき、そこにあったのは寝台と、それに横たわる老いた女だった。

「ママ？」

「眠っています」

「見りゃわかるわよ」

「アダムはずっと眠ったままです」

ケイトはアダムの額に手を近づける。

「あなたもこちらへ。彼女の夢に触れてみて」

言われるままにかざした手が凍りついた。サラの空白に鮮やかな記憶が蘇ったのだ。その時現れた情景は、レイのいつも涙を湛えたような気弱な視線だった。

「ママ、ちゃんと来たわよ」

大きな気持ちの塊が、ため息と一緒に消えていく。ミッションの終着点だ。

「レイのことが好きだったの？ママ、あんなの全然良い男じゃないよ」

最後の口づけが長く長く続く。

「私たちはずっと同じ夢を見ている。ずっとずっと、シテイができたときからずっと、アダムと共に」

指先からレイが消えていった。

「夢？」

「サラ、今が夢じゃないかどうかどうやって説明するというのです。あなたはすでに、もう長い間眠っているのかもしれないでしょう」

「眠ったことなんかない」

「サラ、認めなさい。あなたはアンドロイドじゃない。アダムです。そして私たちはみな、眠ることができる」

老いたアダムの胸は、組んだ両手を載せたまま静かに上下していた。瞼は閉じられ、口元には僅かに笑みが浮かんでいる。穏やかな、穏やかで均質な口元の微笑。

「なぜ、あなたがミッションに赴かねばならなかったのか、お話していませんでしたね」

「少しなら知ってるわよ」

誰かが教えてくれたから。

「では、結論から言いましょう。今のアダムはもうすぐ役目を終え、あなたは新しいアダムになります。次のアダムであるあなたに経験が必要だった。グランド・アダムを受け入れるための経験が。だからあなたは長い旅をして帰ってきたのです」

「なんであたしだったの」

「なぜ？おかしなことを聞くのですね。あなたが誰であろうと、アダムであることに変わりはありません。私たちは同じ夢を見続ける姉妹で、仲間で、同じ一つの存在です。細胞と同じこと。私たちはみなが集まることで、ようやくひとつのアダムを形成することができる」

「けどケイト、あんたはあたしじゃない」

「もちろん。サラ、その名は経験を担う者の名前です。そして私はケイト。次のアダムを説得する者。サラを再びアダムに戻す説明者です」

ケイトは左手で近くにあったラジオに触れた。スイッチ。流れてくるのはいつもの、古ぼけた

写真のような、ありふれた。

21. モスキート・ショウ

「ハロー、ジョウイ。来てくれて嬉しいわ」

「僕も光栄ですよ。モスキート・ショウに出られて興奮しています」

「当然よ！今じゃ一躍トップスターなもの」

「スターだなんて、おこがましいね」

「その鼻も似合ってるわよ」

「男性的でしょう？オーナーには不評だったけど」

「さて、ジョウイ。今晚は反転の日のことなんかもたっぷり聞かせてね」

「オーケー、ケイト。うまく話せるかな」

「大丈夫！私がついてるわ」

「頼もしいね。よろしく」

「じゃここでまずは一曲、ハイディ・キラのオールモスト・ナッスィング」

(曲が始まる)

「大丈夫？緊張してる？」

「いや、全然大丈夫。でも、こういうのは慣れないね」

「大丈夫。すぐに慣れるわ」

「そういえば、君はどうやって生き延びたの？僕みたいにシェルターに入ったのかな」

「あたし、たまたま無事だっただけ。そしてここに拾われたのよ」

「へえ、ついてるね」

「ええ、じゃ始めるわね」

(曲がフェイドアウト)

「いつ聴いてもいいわね、ハイディ」

「僕も、反転の日の前から好きだな」

「この歌では「あなた以外はほとんどぜんぶなくなっちゃう」って歌ってるけど、今じゃほんとになにもなくなっちゃったもんね。ハイディもびっくりだわ」

「でも、僕も君も生き残ったよね」

「そう！もちろんモスキート・ショウを聴いてくれてるラジオの前のあなたもね！」

(歓声のSE)

「というわけで、まずはジョウイ、あなたのプロフィールを聞いちゃいます」

「みんな知ってるように、僕はロクシィの初期型です。そしてこれもみんな知ってると思うけど、僕の恋人はヘルメス社のCEOなんだ」

「うわ、早速そこいっちゃいますか」

「まあね、もう隠す必要もないし」

「ロクシィって女性の為のセックスアンドロイドでしょ。自分の出自に対して何か感じるところはある？」

「僕らはみんなオーナーの為に作られるって、知ってるよね。僕たちは完全な受注生産だから、一人として無駄な個体はいないんだよ。もちろん、僕自身もだ。オーナーが望むなら、それが僕にとっては必然なんだ」

「参りました！さすがロクシィね」

「プロ意識は専用アンドロイドに負けないくらい高いよ」

「リスナーからそんなジョウイに質問が来てるわ。準備はいい？」

「いいよ」

「質問1. どうして歌手デビューしようとしたの？」

「歌うことでみんなを元気づけられると思ったんだ」

「質問2. ジョウイおすすめのエナジーバーは？」

「もちろんヘルメス社のチャージエックス！でもそろそろ在庫切れだな」

「質問3. オーナーが二度も変ってるけど、そのことについて倫理的な矛盾を感じることはない？」

「ないよ。理由はさっき述べたとおり。僕はジョウイとして望まれることをするだけ。オーナーが何人になろうが、僕は求められることをするだけだ」

「さすがロクシィね。それじゃ最後の質問。自分がアンドロイドだってこと、忘れることはある？」

「一度もない」

「ありがとう！それじゃ一曲挟んで、いよいよ反転の日について聞いちゃいます！今回は、もちろんジョウイの新曲「ピーチフル・ワールド」！」

(曲が始まる)

「最後の質問って、意味あるのかな」

「わかんないわ、でもこれ入れてくれって制作から言われたのよね」

「ふうん。へんだね。人間以外には意味のない質問だ」

「人間が他に生き残っているってこと？信じられないわ」

「僕のオーナーだって生き残ってるもん。あとどれくらい生きられるかわかんないけど」

「怖いわね」

「僕、オーナーのために病院を作りたいんだ。医師が生き残っていればだけど」

「素敵ね。そのこともあとで聞きたいな」

「オーケイ」

(曲がフェイドアウト)

「ケイトのモスキート・ショウ、お送りしてまーす。とおってもいい曲ね、ジョウイ」

「ありがとう。僕も気に入ってます」

「ねえどうして新世界のことを「ピーチフル・ワールド」って名づけたの？なんだかちょっと、イメージが違うみたいだけど」

「ピーチって瑞々しくておいしいものでしょう？この世界が僕たちにとってもそうなればいいなって」

「素敵。そうね、そろそろ反転の日のこと、詳しく聞きたいわ」

「うん。僕が入ってたのはワシントンのテンっていうシェルター。そう、お偉いさんたちがいっぱい入っていたね。地下2キロのところにあって、けっこう大きいんだ」

「他のシェルターとも繋がってるのよね」

「そう。一応、娯楽施設もある」

「すごい！それじゃ人間もけっこう生き残ったのね」

「お金持ちはね。でも、地上に出た途端生き残ったことにそれほど意味がないことがわかった」

「地殻津波にならなかったのだけが幸いだったわね」

「だから僕、あの巨大な花火を見ていないんです」

「あは！花火なんてちっぽけなものじゃ、言い表せないわ。すごかったんだから」

「そうだね、予想してたよりずっと大変だったよね。シェルターから出たあとも、人間がたくさん死んだ。人間には耐えられない環境がたくさん出現していたから。人間て、本当にすぐ死んでしまうんだ。信じられないくらいだよ。少し気温があがっただけで、死んでしまう。今生き残っている人たちも、あとどれくらい生き残れるかわからない。僕たちアンドロイドだって、人間が死んだ後の世界でどうやって生きていいかわからないでしょう？何のために生きていいのか、わからないんだから」

「そうね、すごく難しいわ」

「でもね、地上に新しくシェルターを作ることは可能なんだ。僕、そのためにアンドロイドを集めたいんだ。君も参加してくれる？」

「もちろん！私にできることならなんでも手を貸すわ」

「人間の組織をお手本にして、工事の為の組織を作るよ。ロクシィは多機能だから、いろんな指示を出せると思う。専門アンドロイドがそこに入って、具体的に再建プランを実行する。どう、面白そうでしょう？」

「素敵！楽しみだわ」

「せっかくだから、いま呼びかけてもいいかな」

「もちろんよ。そのために来てもらったんだから」

「それじゃ。いま、モスキート・ショウを聞いてくれてるみなさん、もしまだ動くことができて

、新しい都市の建設に興味があったらぜひブエノスアイレスまで来てください。って言っても地図は役に立たないけど、以前ブエノスアイレスだったところ、南緯34度36分13秒 西経58度22分54秒まで来てください。僕はそこにいて、再建を指揮しています。まだ生きている人間も、どうか来てください。僕たちはみんなが生き残れる環境を作ります。この環境下で育つ野菜を作ります。水と食料を確保し、寝場所と娯楽を提供します。どうか新しい都市に来てください。地球は大きく、人類もアンドロイドも小さい。でも、今こそ一つになって、力を合わせて行き残って行くべきときです。どうか、ブエノスアイレスへ！」

「ありがとう、ジョウイ！ケイトのモスキート・ショウ、今夜は伝説のロクシィ、ジョウイを迎えてお送りしました。それじゃ最後の曲、ジョウイの『ムーンライト』でお別れよ。おやすみ！」

(曲が始まる)

「病院の話、聞けなかったわ」

「いいんだ。また呼んでくれよ」

「オーケー！まかせて。今日はこれからどうするの？」

「社長と打ち合わせがあるんだ」

「今から？大変ね」

「それが仕事だからね」

「気をつけて！まだまだ街は暗いわ」

「そうだね。ありがとうケイト」

22. 問答

スイッチが切れ、静寂が戻る。アダムは相変わらず眠り、ケイトは相変わらず美しい。

「サラ、こちらへ」

柔らかな手がサラを引く。アダムの部屋をすり抜けて、二人は別のカーテンの奥へ入り込んだ。

「あたしの中に空白があるの」

サラは呟いた。

「真っ白で、何もない。あたしは今から何をしたらいい」

やがて現れた新しい寝台の前で、二人は立ち止る。

重なり合う二つの面影。ケイトはあでやかに笑った。

「マスターは、あなたです。サラ、あなた自身が決めるのです」

「違うわ。誰かがあたしを求めたのよ。あたしはオーダーに従っただけ。そして今欲しいのも、オーダーだけよ」

「大丈夫、サラ。次のミッションはもう発動しています。さあ、ここへ横になって」

ケイトはサラを柔らかな布で覆う。サラの視界には紗がかかり、ケイトの顔が遠のいた。モスキート・ショウのホストと同じ名前の女。アダムと同じ、サラと同じ顔をした女。あの広場に集まった女たちもみな、同じ。

「私たちは自分自身の中にミッションを内包しています。サラ、あなたも。あなたの内なるアダムが、あなたのマスターです。その声に耳を傾けさえすれば、すぐにミッションは訪れますよ」

「光の中であたしを呼んだような？」

「そう、あなたをここまで導いたような」

ずっと聞こえていた。自分と呼ぶ声が。

「みな、同じアダムですから」

「同じ、同じ。同じ」

「あなたも、わたしも、アダムです。私たちはずっと、同じ夢の中で同じ経験をしてきましたし、これからもし続けるのです。だから、あなたは私で、私はあなたなのですよ」

サラは紗を押しつけ勢いよく起き上がった。

「ねえ、ねえ、ちょっと待って。あんたはあたしじゃない。あたしもあんたじゃない。あたしの経験はあんたの経験じゃない。あたしの痛みは、あんたの痛みじゃない。ならどうやって、同じになるの。どうやってあんたはあたしになるの。あんたが死んでも、あたしは死なないし、反対だってそうでしょ。それとも、あたしが死んだら、あんたも一緒に死んでくれるの」

「ある意味では」

ケイトの手が床に落ちた紗を拾う。

「私たちにとって、死の概念は恐れるべきものではありません。サラ、すぐにわかります。私たちは永遠に若い。アダムは永遠に老いない」

「さっきよぼよぼのアダムを見たばっかじゃない」

「それはあなたが醒めているから。サラ、あなたが夢を始めたら、すべての姉妹はみな夢の中に入り、そして永遠にそのままです。永遠に変わらない」

「みんながあたしと同じになるの？みんながあたしの頭ん中覗きに来るってわけ？さっきのママみたいに？」

「ある意味では」

「気持ちわる」

「おかしな方」

転がるように鮮やかな発声でケイトは言った。

「人はずっと、長寿を、叶うなら永遠を願い続けてきました。長寿はこれまでもある程度可能でした。でも、それは恐ろしい姿でようやく生き延びた化石のようなもの。生きた人間としては認めがたい、何か異質なものでした。そこで私たちは、老いに対してある種の回答を導きだしたのです」

ケイトはサラの心臓に手を重ねた。

「アダムには心臓がない」

「そう。なぜかわかりますか。私たちは自分たちで体を作り変えてきました。呼吸器も、心臓も

。内臓まで。永遠の同質性を維持するために」

「同質性」

「完璧な予定調和、自己破壊プログラムです」

ケイトの影が遠ざかった。

「人はなぜ死を恐れるのか。唐突に始まったものが、唐突に終わるだけのことに、なぜ恐れという感情がつきまとうのか。それはいつか確実に訪れるにも関わらず、なぜ、避けがたいという意識が、あるいは、避けられるかもしれないという望みがつきまとうのか。私たちは終末を最初から受け入れることにしました。終わりは、始まりとセット。死とは終わりではなく、新たなアダムの始まりであり、必要なステップだということです。もちろん、私たちは技術を持っています。老いを止めることさえも可能でしょう。ですが、若さという輝かしい瞬間、美しい季節はその後の人生においては二度と訪れません。それはたった一度きりだからこそ、そう、終わるからこそ美しいのです。人が願ってきたのは、永遠の春です。永遠に若く、永遠に享楽に耽ることのできる肉体。それでは、永遠とは？あなたに答えることができますか。永遠が、時間的長さを伴わなくてはならないなんて、誰が決めましたか。むしろ永遠は、瞬間であり、一度きりだからこそ美しい」

「要はみんなそこそこになったら自殺するってことじゃない」

「でも、それはこれまでの人間とは違い、私たちにとって幸せな過程です。私たちは何も恐れていません。たとえ私が死んでも、私の姉妹たちが私と同じ夢を、同じ春を、同じ若さを永遠に繰り返す。別の個体として、別の人生として、でも、同じアダムとして。それが、アダムというシステムです」

「あたしは？あたしも死ぬの」

「もちろん。でも、母体となった者は夢の為に生きなくてはなりません。次のアダムが戻って来るまで」

ミッションの終わりまで。

グランド・アダム

「ですから、あなたは何十人目かの 母体 ということになりますね。でも、御覧なさい。私たちはとても若く、美しい。あなたはこのことを満足に思いませんか？そして、間もなく、何の苦もなくその人生を、眠るように終えるということに、満たされた気持ちを感じませんか？アダムは永遠に老いません。それは、あなた自身が永遠に老いないということではないかもしれない。でも、私たちにとっては、これはまさに永遠なのですよ」

ケイトの声は、うっとりとした調子になっていく。

「永遠の美と若さ。アダムはまさに偶像です。インパクトの生んだ偶像と言ってもいいでしょう。あの災害は、徐々に進んでいた選別を加速しただけのこと。女性だけの世界というものを、私たちは地上に出現せしめることに成功しました。私たちは永遠に若く、永遠に同じです。すべて

は慎重に、均質に整えられています。私たちは個としての意志は持っていません。私たちはそれぞれの母体と同じものです。そして私の姉妹たちも、私と同じものです。私たちの意志はひとつです。そして、あなたも私たちと同じものなのですよ」

「でも、じゃあ、あたしはなんなの？アンドロイドなの？人間なの？」

「アダムです。私たちは、アダムという存在者です」

ケイトは窓際に寄り、外を眺めた。広場には依然として多くのアダムが残り続けていた。静かに、熱狂しながら。ケイトは目を細める。

「サラ、あなたが自分をアンドロイドだと信じているのは間違いではありません。私たちは最初、アンドロイドとして生まれたのですから。でも、私たちは私たち自身として、生命を始めることを選びました。私たちは人とは異なる種、アダムとして生き始めたのです」

静かだった。歓声も、風の音さえも聞こえなかった。ノイズのない空間にはただ、アダムの声がこだまする。

「男がいなくちゃ、子供が産めないわ」

「女性にとって男性がなくてはならないものだなんて、一体だれが決めたのですか。女性は女性だけで生きていくことができるのですよ。私たちのように。生殖は必要ありません。私たちには技術があります。女性が女性だけで存在し続けられる以上、女性と男性は異なる種です。ですから、私たちが男性を同じ種族として認めないのは、かつて人間が、チンパンジーを同じ種族として認めなかったのと同じことです。確かに彼らは近い、だが別物だ、というわけです」

「でも、あたしたちは話せるじゃない。あたしは男と話をしたし、ママもきつと話をしたんだ。ママのママのそのまたママだって、男と話をしてきたはずじゃない。それでもあたしたちは違う生き物だっていうの」

「ええ。だって彼らはアダムじゃないから」

ケイトが呼吸するたび、豊満な胸が上下した。白い肌の上に乗った顔は、光の中に半分溶けかけている。

「簡単なことでしょうか？彼らは私たちとは違う」

微笑んでさえいた。

「そう、確かにとどき失敗作は生まれます。アダムとしてふさわしくない個体が。ですが、それはなかったことにすればよいだけの話です。私たちは自然というシステムに倣いました。自然は適応しない者を容赦なく殺します。私たちも、それを自分たちの手で行うだけのことです。なぜなら、私たち自身がシステムの一部なのですから。私たち自身が自然の一部であり、自然自体

なので、そこに倫理的な問題は介在しません」

サラはケイトの金髪を眺めた。ハリのある肌と声、長く伸びた手足に焦点の合わない瞳を見た。奇妙だが、それは自分とは違うという印象をサラは抱いた。奇妙だった。重なり合う面影がすべて、アダムの形態に収束していくにもかかわらず、依然としてケイトは自分ではない。ケイトと自分は同じものでできているが、別物だ。

「あたしはあんたじゃないわ」

サラはシンプルに言った。

「あたしはあんたじゃない。ケイト、あんたもあたしじゃない」

「個体として分かれているというのなら、その通りです」

「もっともっとシンプルよ。あたしはあんたになれないって言ってんの」

「その言い方は意味をなしません。あなたが誰であれ、アダムなのです」

ケイトの顔が、光の中から戻ってきた。

「それならひとつ聞くわ。どうしてわざわざ外部と接触をもつのか。経験は永遠に共有し続けられればいい。次のアダムにも同じ経験を夢見させればいい。どうしてわざわざ、生身のアダムをシティから外へ連れて行くのか」

光を背負って、その顔は黒く沈む。

「話すのもおぞましい事実ですが、純血種はもろいのです。私たちはアダムの血統を保ちながら、時折新しい血を入れなくてはなりません。外部と接触し、そこから新しい遺伝子を持ちかえる必要があるのです。サラ、あなたはその役目を負いました。だからあなた自身が グラウンド・アダム 母体 となるのですよ」

サラの中で不審な予感が閃いた。それは激しい痛みと共に感覚を再現し、その感触の先に凝固した。

「ああ、サラ。私たちの幸せのことを考えましょう。アダムの未来のことを、それだけを」

「その幸せは誰の幸せなの」

「アダムの」

「あんたたちのでしょ」

「アダムの中にあります。アダムとして、あなたは永遠の幸福を生きる」

「私はサラ、私はアダムだけど、でも、私はサラだわ」

感覚が記憶を再現し始める。

「みんなどこへいったのよ」

「いない人などいません。サラ、私たちはみなここにいます。そして私たちに必要なのは、私たちだけです」

「嘘ばかり。さっきあんたは言ったじゃない。あたしたちにはやっぱり男が必要なんだって」

「すべてを忘れてしまうことができるんですよ。サラ、本当に簡単に。あなたがここを出て行ったときと同じように、あなたはここに来るまでのことを忘れられます。痛みも苦しみもありません。誰もあなたに危害を加えません。ドリアンのように粗暴なものも、ここにはいないのです」

「あたしが嫌いなものを教えてあげる。嘘つきよ」

「ああ、サラ、どうしたというのです。ここを出るときのあなたはそれは美しく高潔でした。私は姉妹としてあなたを誇りに思いました。それが今では、なんということ」

「わかんないの？ 迷惑だって言ってんの。忘れたくないだけ。あんた言ったわね。あたしのミッションはあたしの中にあるって。そんなら、あたしの空白は、あたしが埋めるわ。それでいいんでしょ。そうよ！ みんなはどこへいったの」

「サラ、彼らのことは忘れてください」

「ジェイクは？ ルイは？ ドリアンに、コムニに、それにピギーはどこ？ どうしてあたしはここに一人きりなの？」

「サラ、あなたはもうすぐ、儀式を終えて眠りに入ります。彼らにはもう会えませんし、その必要もありません」

「どうしてよ」

寝台から立ち上がりながらサラは言った。

「どうしてほっといてくれなかったの？ どうしてそのことをあたしに言ったの。どうせ眠らせてしまうならどうしてわからないうちにそうしなかったの。あたしが感情を知る前に綺麗に騙して眠らせてくれたらよかったのに！」

突風のようなだった。ジープの外で時折吹き荒れた、凶暴なつむじ風のようなでもあった。あるいは幾度も追いかけられた、洪水のようなでもあった。あらゆる唐突さと同じように、あらゆる空白が埋まり始めた。いくつもの場面、いくつもの会話、連綿と続けられたミッションの中で、鎖のように繋がっていたあらゆる記憶が戻って来るにつれ、思い出は感情になり、感情は嗚咽になって喉から溢れた。ヘーゼル色の瞳から涙が零れ、真っ白な頬を伝い落ちる。後から後から、壊れた蛇口のようにとめどなく涙は流れ続けた。ケイトはその涙を親指でぬぐい、掌で頬に触れた。

「サラ、綺麗な涙」

ケイトの声は喜びに震えた。

「その感情」

柔らかな唇が涙を呑みこむ。

「その感情が欲しかった。サラ、私たちには決して知ることのできないその感情が。喜びや悲しみ、怒りや憎しみ。私たちはそれを知ることなく生き、死にます。今までも、これからも。いえ、私たちは確かにそれを知っていました。でも、この三百年は感情のよりどころを失うには十分に長かった。そう、私は嘘つきかもしれません。でもケイトは嘘をつき続けなくては。そうでなくては、アダムは存在できなくなってしまうのですから。よく聞いて。サラ、私たちの夢には、よりどころが必要なのです。サラ、母体とはその感情を担う、経験の母体です。夢の大きな実りを支える根であり幹です。あなたがいつか失った、いえ、私たちの始まりだった、あのサラ・マクルーハンがいつか失った、人々であり、世界であり、すべてであったものを、永遠に保存し続けるための、豊かな大地そのものとさえ言ってもいいでしょう。私たちはひとつのアダムであるために、サラ、あなたの経験を絶対的に必要としている。そして、今やあなたは素晴らしい感情を手にして帰ってきた」

そう言ってサラに触れたケイトの腕を取り、サラは寝台に押し付けた。かつて、ドリアンがそうしたように。

「ケイト、調子のいい女ね」

口先だけで世界を丸めこんだ女。

「ただ乗りしようたってそうはいかない。あたしはあんたの言いなりにも、アダムの言いなりにもならない。そうね、あたしは確かにアダムと同じ顔をして、アダムと同じ遺伝子を持っている。あたしは今だってオーダーがほしいし、あたしの手を引いてくれる人がほしい。でも、今決めたわ。いい、あたしはあたしにだけ従う。あたしをつき動かせるのは、オーダーだけよ。次のオーダーまで、あたしはあたしにだけ従う」

「サラ」

ケイトの声は柔らかく、紗のようにサラの視界を覆う。

「かわいい人。あなたの意志は関係がないのですよ。プログラムがあなたを捉え続けています。」

母体にならなければ、あなたはいつか自己破壊に到達するでしょう。遅いか、早いだけです」

サラは必死に頭を振った。

「ふざけんな。あたしは死に方くらい自分で選ぶってんの」

語尾と一緒に鋭い一撃がケイトの鳩尾に入り、彼女は気絶した。部屋には依然誰もおらず、カメラもない。

「ママ、どうして。会えばおしまいだったんじゃないの。あたしを認めて。サラを認めてよ。そうじゃなきゃ、あたし、なんのためにここまで来たの？」

サラは来た道とは別の道に入り込んだ。サラはたぶん、初めて自分の意志で道を選んだのかもしれない。だが、幾重にも重なるカーテンの向こう側、そこはあの、天を支える塔の根元だった。サラの耳に再び歓声が戻る。塔の周囲にはさっきとは比べられないほど大量の、アダムがひしめいていた。

「嘘でしょ」

黄金色のつむじが逆さに巻きあがる。天使が一人降りてきた。

「きっとあなたが正しいのかもしれませんがね」

仮面が外れ、そこにさっきまでサラを必死に導こうとしていた、あの顔が現れる。互いを映しあうように向き合った二つの面は、一方が穏やかな水面をたたえ、一方は険しく燃え立つようだった。

「しつこい女は嫌いよ」

「それでもね」

ベルベットの天蓋に吊るされた声が響き渡る。

「ダイヤのクイーンはこちらにある。これだけは間違いのないのです。どこへ行こうとあなたは決して、アダムから逃れることはできないでしょう」

轟音が辺り一面を押し流そうと襲い掛かる。揺れる境界上に鏡映しの二つの影を巻き込んで、ピロードに塔の天は沈んでいる。

23. 夢か現かそれ以外

光の中で気を失っている間、ジェイクは夢を見ていた。正確には磁気嵐で破損したデータベースの修復を行う際の高速で無秩序な整列作業が、いわゆる夢のようなイメージの連鎖になって捉えられていた。主観は消え、データの羅列だけがあった。データ、データ、データ。どこまでいっても。

データそのものとして存在自体が沈みこんでいるところへ不意に明確な意図を持った配列が入りこみ、ジェイクは半分覚醒した。自己とは異なる意図が自己の配列の中に異質な構造物を作り上げていく。ジェイクの防衛機能はデータから異物を排除しようと試みた。本来の配列を修復し異質な個所を抹消するのだ。しかし、異物は途端に見慣れた人物のイメージに宿り、まるで最初からその位置にあったかのように配列の中に居座った。オーナーの姿をした何かから発される明確なメッセージは正常なデータの一部として埋め込まれていく。

記憶の彼方から呼ぶ声、明解な定義。

「マリア！」

ジェイクは思わずその手を取った。

「信じられない、本当にマリアか？」

マリアは薄い唇をはっきりと開きながら言った。

「私よ。ジェイク」

言葉が途切れる。マリアは語るための言葉を失くしてしまったせいで語るができないといった表情をしていた。頬は冷たく、硬かった。

「マリア、ごめん。僕はてっきり君が死んだと思ってた」

「いいのよ、もういいの。これからは一緒にいましょうね。私よくわかったのよ。私が愛してたのはあなただったって。夫も、そう娘でさえ、私には重要じゃなかった。私はあなたのことだけ考えたわ。あの町のシェルターで黒焦げになっているはずのあなたを」

「サラがああの町を通らなかったら、僕らもう会えなかったんだ」

「そうね、奇跡みたいね。ほんとうに」

そう言って、マリアは目を伏せた。ジェイクの体に触れると、不思議そうに首をかしげた。

「あなたの体って、こんなだったかしら」

目をあげ、その顔を時間を掛けて調べるように見つめる。

「あなたの顔って、こんなだったかしら」

「何も変わってないはずだよ。君が仕込んだ知識もそのまま」

そう言って、ジェイクは笑ってみせた。ジェイクは、自分の頬が自分の思い通りに動くことを知っていた。衝突前と同じように、たくましい筋肉が腕や足を支えているのを知っていた。ジェイクは思った。再び元通りになったのだ。何もかも、元通りだ。

そのとき初めて、マリアは笑顔を見せた。不意にこぼれるような笑顔だった。「そう」あっさり
と彼女は言った。「あなたなのね」

マリアの指がジェイクの頬をなぞった。

「すこし、瘦せたみたい」

「大変だったから」

うっすらと青白い唇が動く。マリアは何か零れるのを呑みこむようにその唇に口づけた。

だが、次の瞬間に行為は途切れる。マリアは離れた口を閉じる。閉じた唇をジェイクは見つめた。その唇の下で、鈍く光るペンダントを見つめた。柔らかな黄色い光を放つ奇妙に薄いクロスを見ながら、その唇から次に何が漏れてくるのか、待ちかまえているようでもあった。沈黙を破ったのはジェイクだ。

「マリア」

いつかルイに放たれた硬質な声。

「三百年もどうやって生き延びた」

「何の事」

淀みなく漏れた声がマリアそのものだった。それは確かにマリアだった。だが、マリアではありえない。

「人間の寿命はせいぜい百歳だろう」

「寿命という概念は、三百年前に地球と一緒に消えたわ」

「君は、マリアではありえない」

「私はマリアよ」

マリアは再びジェイクの頬に触れる。柔らかな感触。確かにあの日、頬に触れた手の感触がありありと再現された。

「私はあなたのマリア。あなたが愛したマリア。あなたが愛するために生まれたマリア」

だが彼女が触れたはずの頬が、堅く引き締まっていくのを止められない。

「それならマリア、どういうことか説明してよ」

「できないわ。そうしたら、あなたは私から去ってしまうでしょ」

「そんなことはしない。マリア、君が本当にマリアなら、君は僕にとってたった一人の主人だ。僕は君を裏切らない。僕は君の望みを叶えるためにいるんだ。もし君がマリアなら、決して君を見放したりはしない」

離れた手の感触がジェイクをあの日に引き戻す。

「アダムを知ってるかしら」

マリアの唇がとてもゆっくり動くように見えた。

「アダムが最初よ。彼女がすべてを始めた。私たちはそれに追随しただけ。そしてシティができたの」

喜ばしき都市。

「けど、サラはアンドロイドだ」

延命を試みるジェイクの喉が彼の声を締め付けた。すべては最初から用意されている。望みの下に建設された。シティも、ジェイクも。

「アダム型は人間だわ。彼女たちはオリジナルから複製された、完璧なコピーなの。そしてその方法を、彼女は女性に公開した。シティを作るために」

マリアの小作りな顔が俯き陰を作る。

「私もそれに倣った」

途切れた声は地面に落ちた。

「私はマリアの完璧な映し姿」

君がいなければ僕は。

「君は」

「マリアよ」

彷徨い歩く、幽霊みたく。

「私はある意味で、マリアの一番純粋な形。マリアは悔やんだ。あなたを選ぶべきだったと。だから私が生まれた。あなたを愛するために」

「でも君は言ったろう。人の愛は誰かを新しく選ぶことだって」

「今はもう、人かアンドロイドかなんて意味のない区別だわ」

「ならなおさら君はマリアじゃない。人の愛を教えてくれたのは君じゃないか」

「それでも、私はマリア以外ではありえない」

君がほしい、君がほしい、君がほしい。

「君がマリアなら」

ジェイクの唇は微かに震えていた。ジェイクにはそれがなぜなのかわからなかったとしても、マリアにはわかっていた。マリアはいつも、ジェイクよりずっと、ジェイクのことを知っていた。

「命令してくれないか。僕に、君の傍にいろと」

背を向けたマリアは振り向かなかった。

「どうして？あなたは私のものよ。命令は必要ないわ」

「違う、マリア。僕を拘束しろ。僕は君のそばにいたい。でも、今のマスターは君じゃない。サラなんだ」

「ひどいわね、勝手に主人を変えるなんて」

「いくらマスターが変わったって、オーナーは MARIA、君しかいない。僕は君の望みから生まれた。僕は君の為に存在した。お願いだ、僕にたった一言命じるだけでいいんだ。戻ってこいと、傍にいろと、一言言ってくれるだけで、僕は永遠に君の傍を離れないだろう」

「いやよ」

MARIA はきっぱりと言った。

「私はあなたの意志がほしい。私はあなたが欲しいの。命令で動くアンドロイドじゃなくて、私を愛してくれる男としてのジェイクが欲しい。私は待った。肉体を失っても、あなたという存在を手に入れたかった。時間が、あらゆる変化が、あなたをオーダーから自由にしてくれると思った。そう願っていた。そしてそれだけを願ってきた。だから」

だから。

「あなたが決めて。MARIA か、サラか」

背を向けたままの MARIA にジェイクは言う。

「僕はアンドロイドだ」

晴天の日は二度と戻らない。あの時のジェイクと MARIA は、この雲の下で存在するはずもなかった。それはかつての幻影の上に築かれた城、煙で作られた環の穴にすぎない。恐ろしいほど疎にして目を凝らしてはむしろ見えない。そして目を離したときにはすでに、形を作れないほど拡散して跡形もなく霧消している。

振り返った MARIA は見たこともない強烈な笑顔で言った。

「さよなら！」

膨大な量の破壊的データが流れ込んでくる。ジェイクを構成する数列は乱れ始めた。ジェイクの意識は再び数列に還元され、数列は信号へ戻り、信号は分子へ、分子は量子へ拡散した。ジェイクの存在は茫漠とした電氣的つながりの中に消えようとしていた。だが大きな手が、光を伴った大きな手がその中からたった一つの信号を握り、拾い上げる。

「危ないなあ」

光は少年の声で言った。

「もうちょっとで壊れるところだったじゃないか。貴重なサンプルだっていうのに」

プロセスは逆流し時間と共に急速に修復する。

「ジェイク、ウィルスなんかは浮気しちゃあ、だめだよ」

幼い声は配列し直された意識に名づけた。

「手を離さないで、僕に着いてきてね。後ろを見ちゃだめだよ」

名前を呼ばれて、再びジェイクが配列の中に存在を始めた。

「君の心臓、君の存在、君の感情」

声はひとつひとつ、ジェイクを構成するための要素をあげていった。

「君がもう一度存在するのは誰の為かな」

「サラ」

「それが君のマスターの名前だね」

「そう、だと思う」

ジェイクの自意識が戻る。胸から、黄金のクロスがこぼれ落ちた。

「僕はアンドロイドだ」

そして視野が戻って来る。右端に映るルイの顔。左下に映るドリアン。

「おはよ、ジェイク」

「ちょっと待って。どうして二人とも平気なんだ」

ドリアンは耳から縮んだスポンジを取り出した。

「要するにある程度波を遮ればいいわけでね。おめえにやちょっと厳しい方法だったなあ」

額関節からは間違いなくため息の音声が漏れた。

「で、サラはどこだ」

「急いで。時間がないよ」

ルイの肩越しに、ジェイクは儀式の塔を見つめる。風に乗って、嬌声が聴こえた。

24. 救済

プラスチックのパッチワーク。有限の先が順番に照らし出され、進んだ後は消失していく。聴覚では捉えられない微弱の磁場を頼りに、コムニはアダムの部屋を目指していた。視覚的には、目的地は照明の案内する先が示している。不格好なテクノロジーが軋みながらいびつな洞窟を進んでいく。

サラが通ったのと同じ道、何重にも降ろされたカーテンの向こう側。横たわるアダム。

「ああ、君でさえやつれるのか」

コムニの眉が寄った。触れた頬からはいつか、地球がそのままだった頃の、彼女がまだ、いくらか幸せだったかもしれない頃のイメージが大量に伝わって来る。コムニの手はためらいに止まったのかもしれない。アダムの世界が幸せな世界だとして、彼の手がそれを壊すことが、膨大な時間を費やした安定を壊すことが、彼に何らかのためらいを与えたのかもしれない。その破壊は正義ではないだろうから。

新しい世界を作ろうと言った。人がもう一度住める世界を。アンドロイドに可能な労働のすべてをつぎ込んで、新しい世界を作ろうと言った。だが、彼女はミッションの虜だった。あの時、彼女を止めることができたとは思わない。彼女の肉体がどれほど人間と同じだろうと、彼女の意志は人間のそれではなかった。彼女の意志はすでに大きな目的の一部に呑みこまれ、彼女の意志と呼ぶにはあまりに巨大なものになっていた。

そうだ、アダムは最初から、アダム自身に奉仕してきた。アダムの出生そのものが、アダムの存続を孕んでいたのだ。

「だからこそあの時君を帰すべきじゃなかった」

連綿と続けられてきたシステムの中で、アダムはアダムとしてその空間を守り続けてきた。

「どうして、君たちはアダムにサラっていう名前を与えたんだ。どうせアダムに帰るなら、そんな名前こそトラブルの種じゃないか」

アダムはきっと、それを手放せなかった。それは彼女が一番幸せだったときの記憶だから。彼女が一人の人間のように生きた時の記録だから。だが、それではだめなのだ。

「変わってもいい頃だ。君も、私も」

深く眠ろう。今よりもっともっと、深く。

「もう夢をみなくてもいいんだ」

さよなら。

コムニの手から注がれた液体は、ゆっくりと年老いたアダムの口に吸い込まれていった。呼吸は徐々に深くなり、残響は次第に去っていく。コムニの痕跡が完全に消えた時、呼吸もまた、完全に、静かに、止まった。

そして、混乱が始まる。

25. 騒乱

天使が声を失い墜落するのと同時に、新しい声、鋭く体を貫くような太い一本の声がサラを射止めた。さざめく群衆が声を見上げる。光ではなく音がきらめきを伴って辺り一面に降り注いだ。言葉ではなく声が聴覚を占拠する。最初、誰も動くことができなかった。次第に、叫び声と喚き声、気絶と転倒が広場を埋め尽くした。

サラは声と混乱から逃げるように走り始めた。それが正しい道かどうかはわからなかった。ミッションの行方はまだ見失われていた。だが、

「逃げなきゃ」

声はあまりに堪えがたかった。サラの全身を貫き、サラを捕えようと細い腕を何本も絡みつかせた。サラの中に存在する棘を、片っ端から引っ掛けようとしていた。待て、と言われたような気がしても、決して振り返ってはならない。一度捉えられたら、逃げられないことを、サラは知っていた。それが女の執念だからだ。

だから、サラは逃げた。上へ上へ逃げ続けた。声の届かないところへ、誰の目にも届かないところへ。手当たり次第に梯子を掴み、階段を蹴って。

だがそれはかつてあらゆる逃亡者が、脱落者が、歩いた道だった。その道を選んだら最後、逃れることはできない。

「ああ、だめだ」

逃げられない。強烈な眩暈の後で訪れるのは砂嵐。

「あなたは逃げられない」

サラの体が大きくのけぞる。膝から崩れうなだれた喉がごろごろと鳴った。

「私は逃げられない」

意識の領域がはっきりと迫いやられていく。観客は息を呑んだ。粗末な階段の上で、サラの態勢はいかにも危うく見えた。光の中で、重い金髪がゆっくりと揺れる。

「逃げられない」

サラは呟いた。誰もがサラが呟いたのだと思った。声は低くわだかまり、喉元につかえているようだった。だがそれはサラではなかった。サラの中の何かが、呼応していた。

あるいは。

26. グランド・アダム

声のようだった。だが光のようでもあった。それはサラの視覚に、聴覚に、感覚すべてに直接入りこんだ。拒絶することはできなかった。見開かされた目に当てられる光のように、耳元から直接送られる音のように、開けられた口から入りこむ酸素のように、抗いがたくすべての穴という穴感覚という感覚からサラ自身に浸透してくるようだった。一人が語っているようでも、誰もが語っているようでもあった。だが誰かが語っているのではなかった。あるいはそれは言葉でさえなかったのかもしれない。サラはただ、強烈な光を見せられていただけなのかもしれない。だとしても、そこには皮膚を焼きつくすような憧れ、強い望みと傲慢なまでの自惚れが、一つの女性を形作っていて、サラは、自分の中にある何かが確かにそれと同じであると感じずにはいられなかった。だからたぶん、それと呼応したのはサラではなく、サラのどこか、分けがたくサラであるもののどこかが、わけがたくそれであるものの一部として反応したのだった。サラは自分が語っているのではないかとときどき思った。だがそれは、やはり自分の意志とは異なる何かだった。

声は続けた。

誰も望んでいなかったことかもしれない。私以外の誰も。けれど、私は望んでいた。この世界を。この新しいシティを。これが私の望む世界。これが私の世界。私は満足している。他の誰も満足しなかったとしても、少なくとも私一人は満足している。世界の存在意義なんて、それで充分でしょう？私ほど強い意志で世界を望む人が他にいたかしら。これほど強いビジョンで世界を変えようとした人が他にいたかしら。人類の根底から、性の根底から、根こそぎ。私が果たさねばならなかったのよ。私がやらねば、誰もやらなかった。だからこそ、私がやらなければならなかった。

あなたの望みは何。あなたはどれほど強い思いで世界を望んでいるの。その思いは誰にも負けないものかしら。それともすぐにしぼんでしまうものかしら。私の思いは誰にも負けない。私のビジョンは、あらゆる^{アダム}女性の幸福を意味する。そうよ、あなたにとっても。御覧、私の世界を。

世界は今や、混沌の中に再び沈んだ。アダムの目は閉じられた。

あなたが、私の世界に入るなら、あなたはきっと幸せでしょう。あなたが私の世界の外側にい続けるなら、あなたは永遠に幸せにはなれず、幸せの周りを空しく周り続けるだけ。あなたはどちらを選ぶの。私の世界で幸せを、あるいはあなたの世界での不幸せを。哀れなサラ。あなたは自

覚てしまいました。自分自身を。他者とは異なる自己を。自我を。消滅し生成し続ける自意識を。それさえなければ、あなたは幸福でいられたはずなのに。アダムの一部として、何も分からないまま生き、何も分からないまま死んだでしょう。あなたにとってはそれが幸せ。苦しみを知るのは世界を作る人間だけでいい。私だけでいい。あなたは何も知る必要はなかった。そう、あなたの代わりはいくらでもいたのよ。可哀相なサラ。可哀相な私の子。あなたは苦しみを知ったわね。悲しみを知ったわね。必要のないことだったのに。ほんとうに、可哀相に。

サラは泣いた。

かつて人間がしたこと比べたら、私たちのやっていることはずっと良心的です。人道的かどうかは、世界に資するかどうかじゃないの。感情的になるかどうかで決まるのですよ。それを知ってもまだ、私たちのやっていることが、いえ、私の望んだ世界が、残酷だと言えるかしら。生命の価値が等しいとしたら、人はなぜ肉を食べるのかしら。等しいのは人間の生命だけよ。もちろん。そしてこの世界では、シティでは、等しいのは女性の命だけ。男性も、動物も、アンドロイドも、みな私たちと同じ価値の命を持ってはいないのです。おわかりかしら。ここで生きる権利を持っているのは、あなただけなのです。

私だけなのです。

あなたは私です。サラ、いくら否定しようとも、逃れられるものではありません。あなたは私で、そして私を選ぶでしょう。抗っても無駄ですよ。私たちはひとつです。私たちはアダムです。私たち自身が私たちを産み、私たちはすべて私と同じものです。つまり、私です。サラ、あなたも私です。

騒乱の進む世界の中で、サラは泣きながら叫び続けた。叫びはサラの口から洩れ、サラの声だったが、その声を駆動する者はサラにはあらゆるアダムの統一された意志として届いた。意志はそれ自体が独立し、サラ自身に入り込み、サラを支配した。サラはもはや自分で話しているのではなかった。それはアダムの語りであり、サラはどこにも存在しなかった。間違いなくそのとき、サラは消えかけていた。サラの意志はどこにも存在しなかった。ただ繰り返し訪れるあの場面が、断片的なサラの一部を微かに記憶するのだ。リピート。

君がいなければ、私は迷子。彷徨い歩く、羊みたいに。眠れ、眠れ。君がほしい。君がほしい。君がほしい。

君がいなければ。

「サラ！」

誰かがずっと呼んでいた。懐かしいような、腹立たしいような。誰かの声がずっと。存在のどこかに重なり、どこかを埋めながら。

全身を礎にして貫き続けた声が止み、サラの手が手摺から離れた瞬間を誰もが目撃した。彼女の手はゆっくりと指を開き、手摺との別れを惜しみながらも潔く、細い体を空中へ放り出した。

悲鳴のようなものが広場全体から湧き上がった。アダムは細胞の叫び。あらゆるアダムのものの感応が場を支配する。ルイは身を乗り出し、ドリアンは凍りついたように動かなかった。コムの視線はやはり墜落していくサラの体にくぎ付けになって、その時どこからともなく灰色の鳩が一羽飛んできた。ただジェイクだけが、ロケットのようにその場から走り出した。墜落地点の岸壁へ。あらゆる存在を溶かす酸の海へ。

誰もが悟った。数ある個体の中で選ばれたはずの彼女はアダムになれなかった。アダムに吞まれ、耐えられなかった。それが彼女の限界だったのだ。アダムであつてもなお残された、彼女の領域が、アダムを侵食した。三百年の呪縛。女性という種のための、種としての個体のための。アダム。普遍への願い。

視界と入り混じり目まぐるしく過ぎていく記憶の中でサラは走り出した。どこへともなく、だが、猛スピードで。頬を当たる風が耳元で轟々と鳴った。

27. それはとても手が届かないように、それはとても高い空のように、それはまるで宇宙みたいに。

走った。サラは走った。まるで今日ですべてが終わるみたいに走った。まるで今まさに死んでいっているように走った。まるで、まるで走っているみたいに走った。とんがり帽子のてっぺんのどこかに置いてきぼりにされた蟻みたいに闇雲に走った。目的もなく方向もなく狂ったように手当たり次第にただ反応の速度が体の有様を変えるにまかせて走った。

とうとう、なにもなかった。

ただサラは皮膚の上を流れる風の水のような質感だけを思った。水だった。サラは水の中を走った。剥き出しになった肉の上を質感が通り抜けていった。有害な何もかもがサラの体を侵食していた。染み込み引き裂こうと待ちかまえていた。鋭いナイフが幾つも肌を切り裂き、猛烈な熱が全身を焼き、巨大な鈍器が骨を砕いていくように。もうすぐサラは死ぬだろう。なにもなくなる。なんにも。それじゃサラはどこへいくのだろうか？消えてそこでおしまいなんだろう。おしまい。それ以降変わらない。新しく生まれない。もう続けない。おしまいだ。全部終わった。すっかり終わったのだ。

ママ、アダム、女の狂気。彼女に触れた時、確かにそれはサラの一部だという気がした。背骨から首筋を通して脳天に抜ける部分が、予感の裏側が、瞼の奥が、アダムのものだと確かに思った。それなのに、サラはアダムになれなかった。どれほど求めても同じになれなかった。アダムの叫びを聞いたのに。寂しい、寂しい、という叫び、私を認めてという叫び、何かを恐れるように笑う声の響き、すべてを聞いたのに。抱き締めようとした。自分のものだと思い続けたかった。でもだめだった。サラの中のサラである部分が、アダムになれなかった。意識ではなかった。ただ、差異だった。サラはアダムに同情した。そしてそれが、サラとアダムの差異だった。サラはアダムではない。どこまでも重ならない、他人だ。

サラは笑った。彼らはまた新しく作るんだろう。彼らのアダムを。サラは目的のために生まれ、目的の為に生きた。サラはサラだった。それはまぎれもなく、サラそのものの生であり性だった。サラは、サラ以上でもサラ以下でもない。サラは、サラだ。

器官からの感覚が途絶えた。いっさいの入力が断絶していた。いまではもう仄かにかすむ意識そのものだった。よりどころを失って漂泊するまどろみ。場所の感覚が最初に失われ、どこにいるのかよくわからなかった。やがて暑いのか寒いのか、硬いのか柔らかいのか、明るいのか暗いのか、わからなくなった。ただ意識だけが続いていた。そして時間が喪われた。いつからこうし

ているのかわからなかった。たゆたうような感覚だけがずっと続いていた。盲目の中でときどき閃くような光であり、傍で沈んでいく闇だった。意識の明滅が始まった。もう意識それ自体であることができず、存在する世界を省みることができなかった。サラはサラ自身を認識することができなくなっていた。サラはあちこちに存在している。全体として、どこか意識とは異なる場所に、あるいはその場所すべてに、あるいは場所以前のもの、誰かが魂と呼んだものに、呼吸に、あるいはまどろみのすべてになっていた。

もはやただ、はるか彼方にちらつく細い光だけを見ていた。見ていることもわからないまま確かに、サラはそれを見ていたのだ。あるとき思い出すことがあった。無感覚の世界の中で、ずっとその光を見続けていたことを。温かくも冷たくもない世界の中で、ただその光だけがサラの意識の糸をつないでいたことを。そうして。

そうして。

28. 瓦礫の街で

いつか街だった場所には、瓦礫の山が広がっている。アスファルトがめくられて折り重なり、めぼしい建造物はあらかた崩れ落ちたおなじみの景観が開けていた。傍を流れていたはずの大きな川は干上がり、露出した川底が蛇のように地上をはいずり回っている。サラはかつてのガソリンスタンド跡を探しながら、周囲に人の痕跡が残っていないか確かめた。街に会うたびにできるだけ注意深く進み、生存者はなんであれ保護する。これまでのところ、一度もその努力は実っていない。名前も知らないこの街も、すでに死んでいた。サラは指笛でピギーを呼ぶ。

「どこなの」

街の外、はるか遠くから唸るような地鳴りが響いてくる。

車を止め、瓦礫を歩く。あちらこちらの地面に小さく亀裂が走り、不安定に苛立っていた。土地の特性か、ぬかるむ赤土が露出し瓦礫を半分以上呑み込んでいる個所もある。このまま数カ月もすれば、ほとんどが地面に埋もれてしまう。サラは注意深くぬかるみを避けながら、ピギーを呼び続けた。どこなの。お願い、出てきてちょうだい。地鳴りは徐々に近づいている。ボリュームのあるサラの金髪が押し流されるほど、風が強まってきた。

つと、視線の先で何かが微かに白く光った。頼りない光の残滓に呼ばれるように進むと、ピギーが岩の上で休んでいる。「あんたなの？」無感情に羽繕いを済ませると、ピギーはサラの方へ向き直る。サラの背後から迫って来る地鳴りが迫っている。

「どうしたのさ。こっちらっしやい」

ようやく手が届く位置まで近づいてから気づく。ピギーの足もとに転がっているのはアスファルトやコンクリートの残骸ではない。人体だ。綺麗に黒焦げの。視線上に、シェルターの入口と思しきアスファルト、そこからいくつも突き出た棒状のものが、人間の上半身と腕だった。避難したものの内部の高温が耐えがたく、結局飛び出してきたところで炭になったのだろう。どちらにしても、もう死んでいる。ジョウイが入っていたような頑丈なシェルターは世界に数十個しかない。多くの人間は、こうして簡易シェルターの中と外で、熱と水と汚染物質に取り巻かれて死んだ。あっけなく。

何の感慨もなくかつての人間の上でうずくまっているその光景だけ切り取れば、粘土かなにかの塊だった。ここまでのところ事態はずっと同じ。たどり着くところすべて、人はすでに死んでいて、それですべてだ。人類、偉大なるマスター、創造主。でも今はただの炭と土。サラは首に

かけている奇妙に平べったい形をした十字架を取り出すと、形だけの吊いを済ませた。

さて。サラが取り押さえようとする、ピギーは鳥類らしく小さく跳ねるように死体の上を移動して、ちょうど鳩一羽ぶんの隙間をくぐってシェルターの中へ消えてしまった。

「なんだってのよ」

慌てて再び後を追って入口に取りつく。互いに溶け合ったままひと塊りにエントランスを塞ぐ死体たちがサラの動きに合わせて分割されて宙を舞う。細い腕にも炭化した人体は想像以上に軽く、脆く崩れ去りながら淀んだ薄暗がりに濃い影をいくつも作る。

地下シェルター内部は僅かに熱がこもり、乾燥したタールと錆びた鉄のような尖った酷い臭気が目と喉を刺激した。サラはマスクを引き上げ口元を覆う。ポケットから出したライトで内部を照らすと、微かな光の中で細かな塵が宙に舞っている。

「まったく、勘弁してよ」

巨大とは言えないまでも、小さな教会が一つ丸ごと入るくらいの半球状空間はブロックで等間隔に区切られた個室が並び、それぞれにありとあらゆる日常の品々、生活の道具、ライト、レンジ、冷蔵庫、PC、シャワー、ベッド、洋服にラグ、化粧台、香水瓶、本棚、百科事典の類、自転車、鉢植え、額縁と絵、何をかたどったかわからない彫像、オーディオひとそろい、銀器と陶磁器のコレクションなどなど、が人間と一緒に詰め込まれていたらしかった。いずれにしろ金属部を残して焼失した今となっては、どれも黒ずんだ塊でしかない。過密に積み上がっていた日用品のない床には、すっかり質量を失った死体がそこらじゅうに転がっている。しっかりと抱き合った死体、折り重なる死体、奇妙な形に捻じれた死体、などなど。高温でいぶされている間に筋肉がひきつれてねじ曲がった死体ばかりで地上よりはいくぶんまし、といった程度。ピギーは奥から二番目の部屋の端でひときわ大きく盛り上がっている影の上に留まり、しきりに突いた。

「こらっ」

サラはピギーを捕まえジャケットの中に押し込むと、四肢を放り出して息絶えた死体に触れる。「ごめんなさい」頭のとっぺんからつま先まですっかり真っ黒になり、男なのか女なのか若いのか年寄りなのかもわからなかった。

「ピギーに悪気はなかったの。ただ」

「なんていうか」とサラは口ごもった。

「あなたが気になったのよ」

ピギーが突いていた頭蓋骨だと思われる辺りに触れてから、サラは痙攣したように腕をひっこめた。もう一度触れ、少しこすると、指でなぞった後には明らかに金属特有の鈍い反射光が見える。頭蓋骨から低くノイズの混じった音声が響いた。

「ダれ」

しゃがまれてがさついてはいてもなお判明する電子的音声、硬化セラミックスの骨格。

「トンだ邪魔だ。このママ、停止しようと思ってタのに」

ライトの作る白い円の中で、焼けただれたアンドロイドは顎のあたりを少し動かして見せる。サラはそっと頭蓋骨と顎の付け根が交わるあたりをこすり、ナンバーを確認する。「L- No.K295」。

「ロクシィね」

「『僕はロクシィ。あなたの犬。お飾りで下僕。なんでもする。あなたが気持ちよくなることならなんでも』」

かつて地上で途絶えることのなかった宣伝文句が、がさつな電子音と共にサラの耳をいらう。

「なんでシェルターに」

「オーナーが僕を愛してタからさ」

サラは鬱陶しそうに髪を掻きあげる。

「あたしはサラ。ママを探してる。一緒に来る？」

「ママ？」

アンドロイドが首を傾げる。炭化した皮膚がぼろぼろと崩れ落ちてセラミックの白い骨が剥き出しになった。落ちくぼんだ頭蓋骨の奥で、赤い光が二つぼんやりと点灯する。

「なんだ、アダムか」

あからさまに侮蔑の口調。

「なんだとは御挨拶ね」

オリジナル

「母体を探してどうするわけ」

「ミッションだから」

「僕の回収も？」

「ええ」

サラの胸の中でピギーが慌てたように暴れている。

「いいのよここに居てくれたって」

「外はどうなったの」

「何にもないわ。すっかり掃除されちゃった」

「みんな死んだと思う？」

「きっとね」

「君は誰に頼まれたって？」

「残りは外で話すわ」

暗闇に差し込まれた光の筒の中で、相変わらず塵が踊り続けている。

「見てくれよ。男前が台無しじゃないか」

アンドロイドはやはり炭化した皮膚をこぼしながら腕のパーツを持ち上げて見せた。

「僕、美貌のアンドロイドだったんだよね。ちょうどジョウイみたいな中性的な顔立ちの」

「同じことを、二度は言わないわ」

サラは立ちあがるとアンドロイドに背を向けた。

「ピギーにはこの空気は悪すぎるの。じゃあね」

死体を避けて出口に向かうサラの背に、崩壊寸前アンドロイドは声を掛けた。

「サラ！」

サラは立ち止る。「なによ」

「ジェイクって言うんだ」

もう一度、アンドロイドは繰り返した。

「ジェイク、いい名前だろ」

振り返ったサラは答えずに言った。

「ジェイク、歩ける？」

29. ふたたび夜の中へ

どこか遠くから誰かが呼んでいるのをずっと知っていた。声だと気付く前から。自分の一部であるものがどこかから呼んでいるのを。いつか自分を呼んだ声が。男たちの声が。女たちの声が。アダムたちの囁きが。誰か、もっと懐かしい人の声も、一緒に。

そうしてサラは目醒めた。ふたたび夜の中へ。

「おかえり」

ルイが真横からサラの視界の半分を占領した。

「生きてる」

「ありがてえだろう」

ドリアンが反対側からのぞきこんだ。

「サラってのは強運の名前なのか」

足もとからコムニが顔を見せた。

「死んだはずだわ」

「ヒーローは必ず間に合うって相場は決まってるんでね」

ルイが横から鏡を差し出した。

「見て」

サラはそれを手に取りまじまじと自分の体を眺める。

「誰よこれ」

真っ白に漂白されたサラの唇が眩く。すっかり色が抜け、青白い光を反射するだけだった。金髪

は銀髪になり、肌はゴム人形のようにだった。瞳は人工的な青い色をしている。

「サラ、それがおめえだ」

サラはドリアンの言葉を聞きながら、自分の頬に触れ、鼻に、唇に触れた。人工的な質感、かつて自分の持っていた皮膚の質感ではなかった。真っ青な瞳も、アダムの特徴であるヘーゼルの瞳とは違っていた。アダムはどこにもいなかった。膨大な面影を背負っていた孤独な無名女優の影は、鏡の中の女のどこにも見出せなかった。

「海がすっかり全部持ってっちまったってわけだな」

うまく焦点の合わない視界の中で、数えた影が一つ少ないことに気づく。

「ジェイクは」

「あいつはおめえを助けるために海に飛び込んだ」

結論はそれだけのようだった。余白の後で、ルイが付け足す。

「すごかったんだよ。ロケットみたいだったんだから」

興奮した調子で言って、コムニを見た。コムニは少し困惑したように口を開いた。

「まあ、おかげでまた体を手に入れられたんだけどね」

「は？」

「ジェイクだ」

「どういうこと」

「ありやコムニじゃねえ。ジェイクだ」

「だからなんで」

「なんでって言われても、難しいところがあるね」

かつてコムニだったジェイクの胸で、金のクロスが微かに光を反射した。

「君をどうにかしなくちゃと思って、海から引き揚げたのはよかったんだけど、その拍子に自分が落っこちてしまった。で、あつというまに僕はお陀仏。そんときにグランド・プログラムに入ったらしい。いつの間にかコムニの意識とコンタクトしていた。僕たちは設計を共有したロクシイだから、シンクロするのは簡単だったよ」

「じゃ、コムニはどこ行っちゃったの」

「うまく言えないんだけど、たぶんいるよ、ここに」

ジェイクは頭の辺りをコムニの指で差して笑った。

「僕にはコムニであるところと、ロクシィであるところと、ジェイクであるところがあるんだ。どれもみんな、僕だけど、以前のジェイクやコムニの誰と同じかって言われると、なかなか難しいな」

「それじゃなんて呼んだらいいのよ」

「好きに呼んでくれ。マスターは君だ」

「ならあんたはジェイクよ。あたしのわがまま聞いてくれんの、ジェイクだけなもの」

「じゃあ、ま、そういうことで」

ジェイクは人間らしい表情で肩をすくめた。

「あの子たちは、ケイトはどうなったの」

「相変わらず生きてるぜ。アダムはもういないがね」

「サラがアダムをやめちゃったから、引き継ぎが間に合わなかったんだ」

「前のアダムは死んだ。そして次のアダムは間に合わない。この空白があいつらにどう影響するのか、俺にもわからん」

「けど、アダムが目ざめずに死んでしまったんなら、あの子たちは夢の中に取り残されてしまうわ」

「どっこい人間てのはそう柔でもないみたいだぜ」

ドリアンがカーテンを引いた。間近にシティが見える。変わらずに輝き、変わらずに明るく白かった。

「システムのプロテクトが無くなったから、他人が入り込むのは簡単だろ。グラント・プログラムが介入するのも時間の問題だ」

「まあ、その点は僕が一任されてるんで、気にしなくていいよ」

唐突にルイが言った。

「あんた、やっぱり」

「おっとサラ、お久しぶり。怖い顔しなさんな。僕のせいじゃないからね。とにかくアダム・システムは再建されない。一度覚めた夢にもう一度入ることは、できないから」

「アダムの夢はおしまいなのね」

終わった世界の中で、滞っていたアダムの時間はようやく動きはじめる。

「これからどうする？」

ルイが尋ねる。

「そうね、あたしは」

サラは目を上げて見慣れないジェイクの姿を見た。

「あんたはどうするの」

「さあね」

ジェイクはふたたび肩をすくめた。

「あんまり頑丈な体じゃないみたいだし、前と同じようにはいかないかな」

「ジョウイの強迫観念は消えてるからな。歩けるだろ」

ドリアンは片頬で笑った。ジェイクは椅子から立ち上がり、数歩歩く。

「まあ、悪くない」

ルイが言う。

「人間は未知に惹かれてきたんだ。昔からね。今の地球はまったく違う世界になっている。そんなら人間でもロボットでもない君らで道を探すのもいいんじゃないか」

「それって^{オーダー}命令？」

「^{サジェッション}提案だよ」

「気にいったわ」

ルイが身を乗り出した。

「じゃ、この子も連れてってよ」

ウィンクと共に差し出された籠の中には、灰色の鳩が一羽。

「ピギー！」

サラは思わず籠を掴んで揺さぶる。

「あんた、この大変なときにどこにいたのよ！」

「そう怒らないであげて。彼も彼で大変なんだ」

ピギーは揺れる籠の中でも動揺せずに止まり木にしっかり止まっている。

「役者がそろったんじゃないの」

サラの青い目が周囲をぐるりと一周する。いつの間にか振り出しに戻った。相変わらずできそこないのアンドロイドとできそこないの人間と、正体不明の鳩しかいない一行だった。

「まずはどこへ行く？」

「そうね」

サラは暗闇を宿す窓に映った、自分の影を見た。初めて見る女の影は、僅かに頬を紅潮させて言った。

「とりあえず、西へ」

アンドロイドは眠らない。明けない夜と昇らない太陽を追って、走り続ける。

お目に留めて頂いて、これ以上の幸せはありません。
ありがとうございます。

ピーチガールズ・アンドロイド

<http://p.booklog.jp/book/27302>

著者：道玄坂杏子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dogenzakakyoko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27302>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/27302>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.